

# 作東の文化

No.49



作東文化協会

# 作東の文化

No.49



写真「田園風景」江見精治

令和5年10月

題字

真野みよ子

表紙写真

題 漆器「片口と合鹿碗」

塗師 橋谷田岩男（智頭町）

表紙説明

表紙作品2点のうち、お祝い酒を注ぐ際に使う片口<sup>かたくち</sup>（左）は堅地塗（布張り・弁柄朱・ケヤキ木地）、お正月に使う合鹿碗<sup>ごうろくわん</sup>（右）は堅地塗（布張り・黒呂朱<sup>くろろしゆ</sup>・ケヤキ木地。鳥取県美術展入選作品）です。

目次

巻頭言

学生たちの関東大震災

—百年前の学生ボランティア—

……山下 亨……………1

特別寄稿

散歩が短歌を産み出して呉れて

……横山 猛……………3

所感寸言

手書きの文化……………西村 睦美……………6

共生—田んぼの生きもの—

……前田 留菜……………7

社会生活……………日 笠 一 成……………11

点字ブロックの知識……………井 上 健 一……………12

認知症、最強の予防方法は社交ダンス

……鳥 形 初 美……………14

随筆随想

最後の親孝行……………中 田 敏 子……………17

ばあばんへの手紙……………長 瀬 真 澄……………18

朝ドラに誘われて……………影 本 昭 子……………19

我が家のお茶……………浅 田 年 史……………21

プロの仕事……………山 平 利 恵……………22

三万六千五百日……………圓 東 光 夫……………24

ラスベガス・ミュージカルの思い出

……安 東 公 一……………26

歴史紀行

春日神社よもやま—岡僧正と龍頭庵—

……栗 井 睦 夫……………29

角南のつり鐘……………井 口 祥 子……………32

出雲街道の起点……………延 原 順 子……………33

出雲街道文化財調査余話……………豊 福 公 支……………35

佐治漆について……………橋 谷 田 岩 男……………38

江見の移りかわり……………有 友 一 正……………40

ドローンで眺める湯ノ郷と三星・後藤氏

……尾 高 試 朗……………42

平賀元義とその門人たち……………矢 内 直 行……………44

高梁の歴史探訪……………松 井 洋 子……………46



令和五年度研修旅行の報告	49
令和四年度文化展・芸能発表会の報告	53

短文芸

短歌

春	福島美智子	56
看護師	岩本敏子	56
頑張れ	(土居)杉本幸子	57
祖父母	坂井はつ子	57
ふる里にて	中村千州代	57
何だ坂こんな坂	岡田仍子	58
お花畑	平瀬芳子	58
ほのぼのと	土井つゆ子	58
試練を乗り越えて	島根和江	59
あめんぼ(佐用町民プール)	末宗玲子	59
空き家なれど	松井洋子	59
グータッチ	新田千晶	60
コーラス記念コンサート	入矢敏江	60

参道を登りて	浜田くに子	60
あれから一年	日下智加枝	61
類緩む	黒石初江	61
片栗群生	小林洋子	61
コスモス	長澤和枝	62
風吹くままに	豊田絢子	62
九十歳を生きる	黒石登代	62
穏しく閉ぢたし	角利津	63
輪廻転生	須田紀秋	63
地藏ぼつねん	山下三景	63
女孫よ頑張れ	関内惇	63
俳句		
伊予椿	春名はるを	64
美作三の宮	山本宗雨	64
雀の子	豊田絢子	65
時鳥	井口祥子	65
遠昔	沖田はるみ	65
冬	坂井はつ子	66
花菖蒲	高橋ヤエ子	66
四季の詩	青山美和子	66

春一番	尾崎千世	67
白寿歳	樽井悦子	67
蕪の花	山本眞由美	67
台風	(土居)杉本幸子	68
七夕の青き竹	山下三景	68
龍天に	山本那実	68
川柳		
折々に	井上健一	69
夫婦	藤岡洋子	69
老いの日々	山本昌子	70
スポーツの輪	影本守	70
皮算用	五反舎	70
作東文化協会グループ紹介		71
令和四年度 作東文化協会事業実施報告		75
全体事業		75
支部活動		76
連盟事業報告		76
専門部活動報告		77
令和四年度 作東文化協会決算報告		79

作東文化協会会則	80
令和五年度 作東文化協会会員・役員名簿	82
編集後記	90



書『雲』春名善子

# 〔巻頭言〕 学生たちの関東大震災

—百年前の学生ボランティア—

会長 山下亨

百年前の九月一日、相模湾北部を震源として関東大地震が発生した。帝都東京では家屋倒壊や火災旋風が起き、横浜も壊滅。死者は合わせて十万人を超えた。

かつて、私は大震災対策の研究のため神田神保町の古書店で関東大震災関連の図書を買ひ漁った。そのうちの一冊『大正大震災災誌』（改造社編。全八九〇頁）には学者・行政などによる膨大な震災記録が収録されていた。

その中で最も驚いた記録は、東京帝大、東洋大、一高などの学生たちがいち早く被災者救援や罹災調査に動いた記事である。彼らの勇敢かつ自主的な行動。それは概ね次のようであった。

一つ目は、帝大近くの上野恩賜公園での排泄物処理である。上野公園には一時五十万人が避難し二十万人超の市民が避難生活を始めた。当然、毎日の排泄物の量は半端ではない。見かねた帝大生たちは排泄物を処理する穴を掘ろうと考えた。しかし、公園は恩賜の公園、管理者は宮内省。学生たちは果敢に何度も役人に掛け合い決定のないまま実力行使し、公園内各所に排泄物処理場を作った。

二つ目は、帝大構内に避難した約三千人への生活支援である。学生たちは毎日、水を運び食事に必要な食材の確保に動いた。品川などの畑に行き耕作者からキャベツ、大根などの多くの野菜類を手に入れて大学に運んだ。

三つ目は、震災直後から帝都で始めた罹災状況調べと被災者の安否情報を提供する活動である。大規模火

災や家屋全壊などによつて人々は各地へ避難した。親戚や友人などが離れ離れになり、上野公園の西郷隆盛像等にも尋ね人の張り紙が張られた。警察署には全国各地から安否の問合せが相次いでいた。この情況下で帝大生たちは九月十一日に「東京罹災者情報局」を立ち上げた。

役所でもない得体のしれない情報局。その看板を帝大の運動場の角の巡視詰所に掲げる一方、全国の地方紙に広告を載せ更に各地の駅に掲示した。すると、十五日には安否を問い合わせる第一便が到着(四十三通)。情報局の帝大生たちは個別的搜索をしつつ返事を書く仕事に着手した。問合せは一日数百数千と増え受信数累計は三万九千通にも及んだ。大阪等の国内各地からのほか、台湾、樺太、朝鮮半島、シベリア、ハルビン、天津、サンフランシスコなどからも来ていた。

この仕事は罹災情報の収集作業が不可欠であった。帝大生たちはどのような調査活動をしたのか。第一は火災による罹災場所の明確化。焼失区域と残存区域を調べ一万分の一の地図に焼失日時や焼け跡等の情報を記録した。第二は焼残り場所での潰家の実地踏査。第三は死傷者調べ。区役所や役場、警察署、病院、収容所、あるいは学校、大工場、企業、新吉原などに数回歴訪してカード化し死傷者原簿を作成した。第四は迷子の調査。死傷者名簿作りと並行して「迷子カード」を作成した。第五は、立退き先の調査。これは一時避難所や収容所のほか郵便局などで調べたが、地方への移転者も多く情報収集先が多数ありカード作成は困難を極めた。調査は日夜ボロ自転車に乗り気力と体力と頭脳による仕事であった。

こうして収録した膨大な調査データを基礎にして安否を返信する仕事。それはまるで「返事を書く郵便局」であるが、郵便受けは帝大の巡視詰所の下駄箱。ここに全国からの問合せ郵便の束が毎日数回持ち込まれる。学生たちは「仕分係」「統計係」「調査係」「検関係」「回答係」と役割を分担して仕事を進め、最後の「発信函」に郵便局が集配して地方に発送された。

帝大生たちは五十日間を一心不乱に働いた。それは、せずにはいられない学生らしい行動であり、大災難の中で人間らしさを発揮した姿であった。

# 特別寄稿

## 散歩が短歌を産み出して呉れて

特別顧問

横山

(歌人)

猛

人は年を旧ると仕事もだんだん減ってくるものらしい。私も少し暇が出来てきたので、夕方には五千歩を目差して散歩することにした。

人家の在る所を歩くと「空巢狙い」ではないかと、疑われては困るので、吉野川や河内川の辺を歩むことにした。歩むにつれて、ああこの瀬では鮎を釣ったなあ、あああの山では松茸を採ったなあと懐かしさが込み上げて来て、瀬や淵や松や山並みを観ては、心愉しく散歩しているところである。

そんな日々を繰り返しているうちに、いつのまにか裡に短歌が産まれて来たのである。まことに有難いことである。例えば

古里の吉野の川辺を歩みつつ眺むる流れが  
我を招ぐかや(旧仮名遣ひで表記)

あの淀に鯰を釣りしよこの瀬では鮎を釣りし  
よ吉野の川よ

我見てや鴨が飛び立つこれこれこれ散歩す  
るのみぞ戻れよ鴨よ

老い我を恐るる勿れ鴨よ鴨汝なれらはいとも愛  
しかるぞも

川瀬が慌てて川を渡りゆく我は散歩よ獵師  
ぢゃあ無いぞよ

追ひ越せば追ひ越して来る鶺鴒川の辺歩む我

を愉しみてや

さあさあさあ八十九年目の初夏迎へむ川の  
流れの絶ゆるは無からむに

「つと<sup>土</sup>り<sup>採</sup>は」と呼びゐし山も青々と繁れる  
杉の林となりをり

あの山の松は見えざり伐られしや枯れしや  
登りの目印なりしに

この山の松は今なほ健在ぞその根廻りにて松  
茸採りしよ

茸山に入らむ道は雑<sup>ざつ</sup>木<sup>ぼく</sup>と笹に覆はれ入口さ  
へ見えざり

松茸を採らむと登りし彼の山よ猪<sup>し</sup>の親子に  
出会ひし山よ

川辺をし散歩なしつつ見霽かす古里の山よ  
茸採りし山よ

ずい茸に赤茸松茸採りし山今ほも見上ぐる  
のみの老い我

これからも、可能なかぎり散歩をしては、歌  
を詠み上げてゆこうと、体に活を入れてい  
るところである。



# 所感寸云

感想や批評を文章で表現する

簡単そうで難しい

しかし文章化されることで

新たな感想や批評が生まれる



ちぎり絵『風車』青山美和子

## 手書きの文化

西村 睦美

幼い頃、遊びは常に鉛筆と共にあつた。絵描き歌で絵を描いたとき、瞳に星がきらめく人形を描いたとき、着せ替え人形の洋服を作ったとき…。

やがて、鉛筆は学習用具になつた。平仮名や漢字を覚え、英語の筆記体を練習した。そして作文や感想文、レポートと、鉛筆を使ってひたすら書き続けた。学生時代には万年筆になつたが、学びの道程には常に「書く」文化があつた。

三〇代の頃、パソコンなる四角い箱が出現した。ワープロやノートパソコンと形は変わったが、文字は書くものではな

く、打つものになつた。奇しくもタイピングの技術が生き、ブラインドタッチでひたすら文章を綴つた。

けれどいつの頃からだろう、漢字が思い浮かばない。あれ？こんな感じだったと思うけど…。そして、はたと気づいた。「そうだ、手を動かしていないからだ。」「漢字変換に頼り切っているからだ。」

それからは、意識して手書き



で文章を書くようにした。私のお供に万年筆が復活した。日記や俳句、短歌と、指ではなく万年筆が言葉を生み出すようになってきた。漢字もなるべくたくさん使つて、辞書で確認して書くようにした。手帳に書き留める習慣も身についた。

手書きの文化は、一朝一夕には形成されない。それこそ、生きていく道筋に常に「書く」ということが身近にあつてこそ身につく力だ。分かつた気になつていても、書いてみると正確には分かつていないことに気づく。覚えていたつもりでも、書いてみると思いだせないことを見つける。書くことで自分の記憶を再認識している。考える力を鍛えている。手で書かな



ければ身につかないことはたくさんあると実感している。

先日も『漢字の手書き能力文章力に直接影響 京大研究チーム検定試験分析』という記事が読売新聞に掲載されていた(6/9付)。

デジタル機器が教育現場にどんどん導入されている今、改めて、手で書くことの意味を検証する研究が進んでいる。

今や、小学生、いや幼児でも、サクサクとスマホやタブレットで「検索」する時代だ。あの小さな箱の中から遊びでも知識でも何でも探してくる。「博士ちゃん」なる鬼才も現れてきた。

文化は時代を反映する。新しい文化も人類の発展には不可

欠だ。だが、ヒトという種のみに与えられた「手で書く」という行動がもたらす知力は、計り知れない。時代はどう変わろうと、新しい機器がどんなに生み出されようとも、この「手書き」の文化は大切につ

## 共生 — 田んぼの生きもの —

前田留菜

私の住む吉備平野ではまだ大丈夫だが、それでもほんの少し北部になると田んぼに猪垣があたりまえの風景になってきた。猪や鹿との対応はそれはそれは大変なことだろうと思う。何とかうまくやっていけないものだろうか。と思いつつ、また一方で、逆の視点を思っ

ないでいかなければならないと思っている。

折しも、孫がひたすら落書きをする時期を迎えている。手で書くことの楽しさや手で書くことで身につく力を存分に味わってほしい。

田植えどき、田んぼに水が入ると、待ってましたとばかりにその夜から一斉に蛙が鳴きはじめる。蛙は、さあここで子供を産み育てられるぞという喜びに満ちて鳴くのだ。ここは蛙の国かと思えるほど、夜通し蛙の声一色になってしまう。

同じように、豊年蝦あひも兜蝦も貝蝦も、田に水が入ったとたん



源五郎

土中の眠りから覚めて水田に湧き出してくる。豊年蝦は透き通った体に青い胸鰭びれを持ちそれをひらひらさせて背泳ぎしている。兜蝦は天然記念物の兜蟹を小型化した感じでそっくりだ。貝蝦は楕円形の貝の形をしていて、おおかたはオスメス合体して泳いでいる。これらの虫は六月の田植田に一気に湧き出し、七月には成虫になり、卵を産み残し、七月中頃からそろそろ田の水が干されてしま

うまでに一切の作業を終えきつと死んでしまう。

田蛙にしろ、豊年蝦たちにして、それら水田の生きものたちは人間が作る水田を介してそれをうまく活かし人間と共生してきたように思う。赤蜻蛉の一種で薄羽黄蜻蛉も水田でヤゴが育ち、七月初めにわつと羽化する。

一説によると、一反の水田で二千匹の蜻蛉が産まれると聞いた。二千匹は見たことはないが、私も時々未明の水田で羽化に出会わず。昨年は見そこなっただが、一昨年七月九日だった。未明、稲の葉にしがみついで夜明けを待っている幾匹にも出会った。そばを通ると少しだけ飛び立ち、ほんの五メートルほ

ど先の葉に移る。まったく飛び立てないのも居る。こんな感じだから蜻蛉の数は大まかに数えられる。畦を歩きながら五十匹ほど数えてもうきりがないので止めた。

ざっと百から二百匹その日その田で生まれただろうと思う。この蜻蛉たちも水田をうまく利用して人と共生していると思う。

が、ここ数年、この水田の生きものたちが急激に変化している。めつきり減少してきたと思う。今年の植田をのぞき込んでも豊年蝦のたぐいがほとんどいない。自分の田もよその田も次々とのぞいてみるのだが、わずかに私の田に豊年蝦と貝蝦を見ることができた。源五郎

は見かけなくなってしまうたが、源五郎に似ていて口元に牙を持つ牙虫は昨年まではいくらでもいた。草の葉を切り取って折り曲げ、袋状にしてその中に卵を産む。卵を包んだ草の袋が水田の畦ぎわにぶかりぶかりいくらでも浮いていた。私はそれを勝手に「牙虫のゆりかご」と呼んでいるのだが、そのゆりかごもめつきり減った。



蛙も減ったようだ。今日も田の畦を歩いてきたが、水田に飛び込んで逃げる蛙がめつきり少ない。畦草を刈りはじめると刈刃の先をびよんぴよん跳んで逃げてゆく蛙がめつきり少なくなった。

ツマグロヨコバイがいない。もう十年以上ツマグロヨコバイを見ていないように思う。畦を歩くとわっと飛び立つものがすごい数いたのに。ツマグロヨコバイは稲の大敵ウンカにまちがわれやすい。わんさか飛び立つ虫を見て、「ウンカがおる。ようけえおる」と防虫剤を撒く人がけっこう居た。「ウンカはそれほどおらんよ。あれはツマグロヨコバイじゃけん。稲にはそれほど害はないけん大

丈夫じゃあ」と言っても信じてもらえないことが多かった。

ウンカがいてもいなくても、安心のために前もって八月には一度防虫しておくと言ひ、ヘリコプターで殺虫剤を撒いてもらっている人は多い。私は除草剤一回だけは使わせてもらっているが、殺虫剤はほぼ使わない。ウンカが大発生した年でも使わなかった。水田一面に殺虫剤を使わなくても、ウンカが集まりはじめた稲はわかるからその株元へキンチョールを吹き掛けて済ませた。除草剤一回使わせてもらっているおかげで私は除草作業からほぼ解放されたけれど、逆の立場で、そのためにこまっている生き物たちがきつと居るんだろう

なあと思う。ここ最近猪にこま  
っている人間がいるように、こ  
こ最近農薬にこまっている生  
き物たちがいるだろうなと思  
う。

何かがひとつちよつと変わ  
れば、ほかのどこかがどこかで  
変わってくる。すべてのものは  
つながりあっている大きなひ  
とつつながりのひとつだから。  
自分だけが、人間だけが良けれ  
ばいいというわけにはいかな  
い仕組みになっているから。

水田は稲を育てる所なのだ  
から稲が育てばいい。とは言  
え、草も生えない、虫たちもい  
ない、稲だけが育つ田んぼは私  
にはつまらない。そんな豊かさ  
は…。水田は人間の主食を作る  
大切な生産の場であることは

もちろんだけれど、他の生き物  
たちとの共生の場として、ビオ  
トープとしての豊かな場であ  
りつづけてほしいとも願って  
いる。

田植や稲刈は孫たちも参加  
してくれる。苗代で泥まみれに  
なって、マイマイカブリをつか  
まえて見せてくれた。田植田で  
子負虫こおいむしをみつけて見せてくれ  
た。子負虫は私をはじめ見る  
虫だった。名前も知らなかった  
ので夕方家へ帰って図鑑でい  
つしよに調べた。背中にびっし  
り卵を持っていたのでメスカ  
と思ったらこれがオスだと書  
いてあった。メスがオスの背中  
に卵を産みつけ、オスがその世  
話をするのだそう。今年はこの  
子負虫を三匹つかまえて見



こおいむし  
子負虫

せてくれた。その田を植え終え  
るまでバケツに入れて見せて  
もらい、田植えが終わったらそ  
の虫たちにお礼を言つて田ん  
ぼに返してから帰る。

田んぼは働きながら遊びな  
がら学びながら団欒もできる  
場だ。

(総社市在住)

# 社会生活

日笠一成

社会生活を営む中で、各自  
各々の事情、立場、職業（職種）、  
年齢等で差異があると思いますが、  
先ず予定（スケジュール）  
を立てて社会活動をして居ら  
れると思います。然し、社会は  
変動・流動しており臨機応変で  
対処しなければならぬ場合  
が幾多もあります。

例えば、

- ・ 家族・家庭・親族に係わる事  
で、
  - ・ 公務に係わる事で、
  - ・ 所属・加入等している団体に  
係わる事で、
- 予定を変更しなければならぬ  
場合があります。その場合ど

の案件を優先するのでその  
人の人柄が解ると思います。

次に、約束の実行（実現）に  
ついて

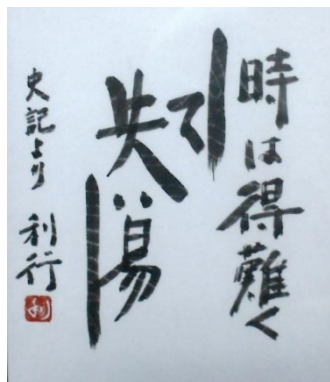
実直・真面目で実行力の有る  
人・約束の実現に奔走する誠実  
な人（社会の変動等の為実行で  
きない場合も有る）。その他の  
人も居られる。（約束を果たす  
確率が高い人ほどその人の評  
価点が上がると思います。）

次に、自由時間（余暇）時間  
の活用について

- ・ 田、畑（菜園）を耕作して楽  
しむ事、
- ・ 一人で運動する事、
- ・ 社会教育・生涯学習等の受講

参加する事、などに心掛けて  
日々好日に成る様に自分に合  
った居場所を求めて頑張る事  
が社会生活の一端だと自分に  
言い聞かせています。





書『史記より』根岸利行

## 点字ブロックの知識

井上健一

最近になって新たな歩道や改良された歩道に、点字ブロックが敷設されるようになった。これは視覚障害者にとっては、ありがたいことに思えるが、敷設方法が間違っている事も多いので、全盲か全盲に近い視覚障害者には危険な施設になってしまう事も多くなっている。

ある大きな駅で、よく耳にする放送が流れている「まもなく列車が到着します。危ないですから黄色の点字ブロックの後ろまでおさがり下さい」だ。この放送が流れると多くの人が点字ブロックの後ろにずらりと並んでいる。この時に前文に

書いた視覚障害者が点字ブロックをたどって歩いて来たかどうかなるのだろうか？「今、動いてはダメですよ！」と引き留めてくれる人が何人いるだろうか？と考えると怖くなった。

現在はエレベーターが設置されて地下道ではなく二階の通路を利用するようになった



津山駅の点字ブロックは全て  
停止用の点字ブロックが敷設  
してあるので、列車のドアの位  
置が把握出来ないし、林野駅は  
列車の連結数が少ないのにも  
かかわらず、ホームの端まで敷  
設してある。視覚障害者が方向  
を見失えばケガをする可能性  
も多くなるはずだ。

点字ブロックは車椅子の方  
には、大きな障害物になってい



る。車輪が点字ブロックの溝に  
はまり込み動けなくなるので、  
点字ブロックの敷設に反対さ  
れる方も多いと聞いているが、  
漸進的考え方をすれば、設置位  
置を少しずらす事で解決でき  
る気がする。

狭い歩道で点字ブロックを  
歩行者と自転車の区別するラ  
インと勘違いし、堂々と駆け抜  
ける自転車も多い。これは多く  
の自治体で広い歩道の歩行者  
と自転車を分けるライン代わ  
りに点字ブロックを利用して  
いる事の勘違いから起こって  
いると思える。

道路の改良等で横断歩道や  
信号の位置が変わっても点字  
ブロックは変えていない場所  
も多い。

ここまで説明したように、安  
全施設のはずの点字ブロック  
が敷設次第で、最も危険な施設  
になっていて事を多くの皆さ  
んにも理解して欲しいと思う。





## 認知症、最強の予防方法は社交ダンス

鳥形初美

私が社交ダンスと出会ったのは21歳の時。当時の若者はディスコでダンスを踊り、ワレンボディコンにお立ち台といった時代でした。そんな時代に私はダンスホールでご年配の方々と社交ダンスを踊っていたというわけです。

それからかれこれ40年以上が経ち、ディスコダンスはほとんどなくなりましたが、シニア世代の趣味として根強い人気を誇る社交ダンスは今では認知症予防として注目を集めています。

『認知症 社交ダンス』というキーワードでネット検索す



ると色々な記事がたくさん出てきます。実際に社交ダンスが認知症予防に繋がるという研究結果もあるようで、アメリカの医学誌に発表された臨床実験の論文が世界的に有名です。

NHK「試してガッテン」で認知症予防の第一位が社交ダンス！と取り上げられ、「きょうの健康」でも紹介されました。テレビ朝日では『みんなの家庭の医学』で社交ダンスが認知症に劇的效果！と紹介され、週刊新潮に認知症予防の記事が掲載されたこともあったようです。

社交ダンスが認知症や認知症予備軍の改善プログラムとして有効だということは、介護の業界ではあまり聞きませんが、社交ダンス業界ではよく知られていることです。

社交ダンスは、音楽を聴き、それに合った振り付けで踊る全身運動です。あらかじめ振付が決まっているフリースタ



イルのダンスは、次々と動きを考えながら筋肉を動かすことで定期的に複雑な信号を脳へ送り、脳が活性化することと。また、人との交流も効果的で人と交流する時に脳機能をたくさん使うからだそうです。難聴が認知症のリスクを高めるのも人とのコミュニケーションが少なくなることに起因していると言われていますね。

さらに社交ダンスは「人の肌に触れる」という特徴があり、手と手の触れ合いは、不安やストレスを軽減するとも言われます。相手が異性の場合には相手に対する意識が脳の活性化に繋がったり、姿勢を正し、かつ足腰や関節、体幹の力を必要とし、筋力や体力もつきまします。

社交ダンスは歩くことができれば、誰にでもできる運動です。「有酸素運動」、「瞬時の状況判断」、「社交性」などを兼ね備え、高齢者症候群ともいわれる「うつ傾向」、「転倒」、「閉じこもり」による社会交流の減少」などの解消にもつながる理想的な活動として、介護業界でも注目してほしい活動だと思っています。

私も今年から高齢者の仲間入りをしました。40年前はもちろん楽しみとして行っていた社交ダンスですが、今では楽しさにプラス認知症予防と健康維持のために続けています。介護される側になった時、社交ダンスで認知症の予防改善を目指すデイサービスがあればう

れしいです♪

認知症の最強の予防方法はウォーキングより社交ダンス！頭で考えながら、身体を動かし、血流も思考回路も、フル回転させ、汗もかいて、免疫力もアップさせましょう！



# 随筆随想

折にふれて

感じたことや

見聞・体験を

なにくれとなく

書き綴る

思いのままに



墨絵『竹とあじさい』岩本敏子

# 最後の親孝行

中田敏子

令和四年六月二十一日早朝  
母は洗面所で倒れており、救急  
車で運ばれるも死亡が確認さ  
れた。

その前日は母の九十八歳の  
誕生日。久しぶりに行くとも  
は、母の実家へ連れて行ってほ  
しいと言う。仏壇で手を合わ  
せ、叔父夫婦と昔話をして満足  
して帰った。

希望を叶えたことでほっと  
してしまい死んだんだと言う  
人もいたけど……最後の親孝  
行だったと思いたい。母の口癖  
は、入院は嫌だ我家で死にたい  
だった。誰の手をとることなく  
すばらしい死に方ではなかつ

たかと思うことにしている。

度々大病を患いながらも、農  
作業に精出し孫、曾孫の成長を  
喜び、一方で趣味の短歌に生き  
甲斐を見出していた。

## 母の詠草より

○嫁ぎゆき十六年を励みて娘  
はそれなりの主婦の座つくれ  
り

○亡き舅が杉を植ゑたる谷田  
の地目は二十四年そのままと  
知る

○漸くに年賦終はれる改良区  
に茂る雑草を亡き夫知らず

○末の娘の白きが目立ち初め  
「銀髪」を誇りし舅を憶ひぬ



久米南町笛吹川歌碑公園の歌碑

○六月はわが生まれ月短か夜  
を名に採りしとふ父はは懐ふ  
(母の名は小夜)

○誕生日の巡れば麦秋のさな  
かにてわれを生みたる母を憶  
ひぬ

○玉葱の蔓立ちならぶ菜園に  
六十年の自負くづれゆく

○未知の世のいかに展くや末  
孫の大学受験をひたに祈りぬ

○歯にやさしき夕餉を思い里芋を煮てゐ窓に雲焼けてゆく

○集中治療室に発起人の一人を置きしまま八十一歳の同窓会なる（平成十八年第八十七回岡山県短歌大会出詠。講師特別賞受賞作品）

○白飯に口を開かむとして目覚むれば鼻腔栄養のみどが痛し

○口腔の癌削りし身を養ふと購めしミルサーに日々継るなり

○ご詠歌は「雲のほとり」とふ雲辺寺にひたすら祈るわが惚け封じ

○久びさに帰省の男孫は耳糜のまなこにゆつくりと言う

歌集を作ろうと言った私の

言葉で、最後の力を振り絞り整理した様子がわかり少しでも早くと編集を終え、印刷製本に出した。母の歩んだ生涯、日頃の思いを一冊の短歌集にまとめ五十部を身内の者に配付し、私の親孝行は終わった。母の短

## ばあばんへの手紙

長瀬真澄

ばあばんへ

また生まれかわったら心佑の子だったらいいな。

つぎ生まれかわるとき男かな女かな、どっちだろうね。

心佑もおなじところに行くから。まっけてね。

またあえたらいいね。おじいちゃんもいるからかぞ

く一人じゃないよ

歌の師、中島義雄先生（久米南町）は製本中に亡くなられ間に合わなかった。もう十年早く取り掛かっていたら、母にも母の短歌仲間にも配ることができたのに、それが残念である。

二人いるからきつと楽しいから。

だいじようぶだよ。

こわいな、とおもっても

みんなが下からみまもってるからだいじようぶ。

ばあばんも空からみててね。

おじいちゃんにも手紙見せてね。

心佑より

私の義母の葬儀の日にその曾孫が書いた曾祖母への手紙です。

どなたのお家でもどなたの葬儀でも別れの時の辛さは格別です。小学三年生のこの曾孫。お別れがよほど辛かったのでしょうか。家族のことやお年寄りのことは理解できていても、八十歳以上年の離れた曾祖母の人生の大半を理解できてはいないはずです。でも、別れの辛さは可愛がつてくれた愛情の強さに比例します。

同居してなくても曾孫は毎日のように出入りしていました。曾祖母は、息子のように付き合ひ、野菜作りの畑で遊ばせたり、育てたイチゴと一緒に採ったり。いろんな昔話もした。

いつも愛情たつぷりの言葉と態度で接していた。晩年の思いもこの曾孫に伝えたかったはずです。

曾孫は、小二。脳裏に深く強く刻んできたばあばんとお付合いの思い出を未来への羅針盤として生きていくことでした。

## 朝ドラに誘われて

影本昭子



朝ドラ「らんまん」のモデル、牧野富太郎博士は「雑草ゆう草はないき。必ず名がある。天から与えられ、持つて生まれた唯一無二の名があるはずじゃ」と言っている。また、「まいあがれ」の中でたかしくんは短歌作りを通じて、喜びや悩みを表現していた。私は、そうやなあ

思いながら日々目にする草花への思いを短い言葉で表現してみた。

・道端や畑の畔の草や花名前は知らない名前を知りたい

初春

・正月さん迎える飾り松や竹見よう見まねで門松になりぬ



ちぎり絵『花の王』影本昭子

・あつここにも咲いて知る梅のあり場所私は梅です私も梅です

・ホトケノザオオイヌフグリナズナたち光の春に満面の笑顔むけ

・チューリップかぶった雪の下で春の出番をひっそりと待つ

・たつぷりと誇らしげに咲くミモザの花男性からの輝く贈り物

### 春

・サクラも桃もつつじまでかけ足で過ぎ去り今フジの紫あざやか

・りんとした白い小花たちガマズミと名前知りよけいとおいしい

### 初夏

・ヒメウツギノバラにガマズミ初夏の山は白が似合う

・水たたえ山々映す田んぼには風に揺れる早苗たち

・まつすぐに空を見つめるピンクのアザミ強い意志かなトゲトゲの葉

・輝く緑葉サルトリイバラ子ども頃はかしわ餅のハッパ

### 夏

・百日紅百日草お墓に仏さんに大活躍長く咲いてありがとう

### 秋

・忘れずに今年も咲いたヒガンバナ体内時計狂うことなく

・ふんわりとピンクに染まるアケビの実散歩のおみやげ夫から私に

・タデの群好みは好き好きいわれるがはにかむピンク畔を賑わす

・こぼれ種から今年も咲いたコスモスたち宇宙に広がれ平和の花よ

・甘い香りぱっと咲いたね金の星ふんわりふつくら庭々に

・元気な黄実りの秋と見まちはう勢い見せるセイタカアワダチソウ

### 冬

・ヒイラギマツカサ赤や黄の実カズラに巻きつけ手作りりー

ス

牧野博士は「どの草花にも必ずそこで生き理由がある。この世に咲く意味がある」とも言っている。

知らない花がいつぱいあるが「頑張つて咲いたんだね、ここに」と愛でながら草花たちを見ていけたらなあと思う。

## 我が家のお茶

浅田年史

我が家ではコウカ茶（カワラケツメイ茶）を栽培して毎日飲んでいます。九十七歳の父が物心ついた時から飲んでいてというお茶です。マメ科の一年草であるカワラケツメイの茎や葉を乾燥させて煎じたお茶です。浜茶・岸茶・豆茶などと呼ばれています。別名「弘法茶」とも言われ、弘法大師が全国行脚の際に、広めたという説もあ

ります。

カワラケツメイ茶は、消化促進や抗酸化作用、血圧や血糖値の調整効果、利尿効果など健康茶として知られています。強壮、鎮咳薬として脚気、腎炎、黄疸、偏頭痛、慢性便秘、夜盲症などにも効果があるそうです。

甘く香ばしい味と香りが特徴で、とても飲みやすいお茶で

す。昔から民間薬として親しまれてきた歴史があります。

以前は私たちの地域でも多くの家でこのお茶を栽培し、飲んでいたようですが、今では我が家ともう一軒だけになってしまいました。今までは母が畑に種をまいて栽培していましたが、この数年は私がお茶の担当になりました。五月中旬〜五月末までに種をまき、八月末〜九月上旬に刈り取ります。お茶の製法は比較的簡単で、九月頃、花と若い実が両方見られる時期に刈取り、洗った後、風通しの良い日陰で干して乾燥させます。乾いたものを押切などで3cmか4cm程度に刻み、焙じて（軽く炒つて）からやかにひとつかみ入れコトコトと煮



立てます。急須でも出来ます。大麥薫り高く、苦みのないまろやかな味わいのお茶となります。しばらく置いておいて冷やしてもおいしくいただけます。

数年前、津和野に旅行した時、「名物のお茶です。とてもおいしいですよ。飲んでみてください」と言ってお出されたのがこのカワラケツメイ茶でした。津和野の名物ですと言って出してくれた店の人の顔が誇らしげでした。我が家のお茶をその時少し見直しました。

我が家の朝は味噌汁とこのお茶が始まります。毎朝、私がお茶と味噌汁の担当になり作っております。お茶やコーヒーを飲むときはほっとできます。

日本の伝統的なお茶のひとつ

つであるカワラケツメイ茶を暮らしの中にて取り入れ、日本人が大切にしてきたお茶の文化についても学んでいきたいと思いはじめました。

## プロの仕事

山平 利恵

ある日、姫新線で佐用から姫路に出かけたことがあった。途中で席が空いたので座り、疲れいたので眠ってしまった。

姫路について目が覚め電車から降りたが、何か違和感がある。すぐに気が付いた。左手首に付けていた腕時計がないのだ。何かのはずみで外れたのか？留め金はゆるいわけではなく、むしろかたい方なのに：

と思いつつ急いでUターンした。

姫路から折り返して佐用行きになる電車は、まだホームに停車中でドアも開いていた。座っていた辺りの床をよく見て座席の隙間に手を入れてもみだが腕時計は見つからなかった。

まさに「狐につままれた」気分だったが、この時はまだ「



カワラケツメイ



誰かに盗まれた”とは思って  
いなかった。いくら眠っていた  
とはいえ、昼間の電車内であ  
る。泥酔していた訳でもなく誰  
かが腕時計を外そうとすれば  
目が覚めていた筈だ。ほかの乗  
客の目もある。悩みながらも一  
応、駅に紛失の届けを出して帰  
った。

次の日、姫路駅からよく似た  
時計が届いていると電話があ  
った。トイレ近くの通路に落ち  
ていたと言う。

駅に向くと確かに私の時  
計だった。しかも壊れていなく  
て無事に動いている。ああ、良  
かった。ところがよく見ると一  
ヶ所異変があり、そのことで私  
は、これはプロの仕事だったの  
だと確信するに至った。

時計は夫からの誕生日プレ  
ゼントだった。私の趣味に合わ  
ない華美な物だった。淡いピン  
クの文字盤の周りをぐるっと  
小さなダイヤが埋め込まれて  
いる。もちろん本物ではない。  
が、最近の偽物はよくできてい  
て、プロでも確かめないと分か  
らなかったのだろう。遺失物の  
窓口で受け取った私の時計は、  
一ヶ所だけダイヤがなくなっ  
ていたのだ。

私はその日も前の日もカジ  
ユアルな、わかりやすく言えば  
粗末な身なりをしていたが、プ  
ロはそうした外見には惑わさ  
れないのだろう。そしてダイヤ  
が偽物だと判ったらもう用は  
ない。そのまま時計は放棄した  
のだ。もし単なるイタズラや心

を病んだような人なら、だまされ  
た腹いせに時計を壊してい  
たのではないだろうか。

とにかく、何気ない日常の生  
活の中に時として思いもかけ  
ない非日常が訪れる。

皆様もどうぞお気をつけく  
ださい。





生け花 溝曾路万寿美

## 三万六千五百日

圓東光夫

本日は晴天、津山鶴山桜の下で黒い制服の若者三人。身長の高いのは広島県生まれだが本籍は違ふと言う。次は備中境の真庭生まれ、もう一人は峠一つで向こうは播州だという作州人。いずれも津山市とはほど遠い。津山の桜は初めての連中。住居は津山市昭和町で間借り住まいだ。今日一人は公休日、一人は夜勤明け、もう一人は今晚六時の出勤だ。お客さんから津山の桜を聞かれたが知らない者ばかりで、これから開花状況を見に行こうと出かけ

てきた。三人とも間借り住まいだか

ら弁当はない。吉野館の弁当だ。お酒はなし水筒のお茶だ。行く途中の書店で雑誌を買う。桜の開花はまだ少し早めだ。石垣と桜のつぼみを見て歩く。

お城の建物は無いが、よくもこんなに石を積み上げたものだと感心する。一寸早目に咲きかけた桜の木の下で弁当を開く。中は見慣れた汽車弁当だ。

途中の書店で買った雑誌を見る。雑誌に「昔、人間五十年と信長公は言っているが、世の進んだ今日だ三万六千五百日はどうか」といった記事がある。信長公の言う五十年は昔のこと、今は世が進んでいる。三

万六千五百日つまり百年ではどうかということだ。

我々には遠い話だ。今は支那事変の最中だ。徴兵検査は目の前だ。しかし運次第では百年とは達せられない年数ではない。やってみるか、目標は百歳の誕生日だ。若者の夢は大きく、桜の花見は忘れて話し合った。

でもそれまで三人一緒ではない。これから自分達には兵役がある。生きておればの話だ。又会えるだろう。

まもなく転勤で三人はばらばらになった。それぞれに職場も変われば兵隊にも行った。

太平洋戦争で三人は分かればかれになった。兵に行く前無事で生きて帰れたら、津山で会おう、津山時代の話をしよう。

う。そしてその後百年の話もしよう、長い人生を語り合おうということになっていた。

百歳は戦争の向こうだ。「生きて又語り合おう」は昔話になった。それぞれに召集令状がきて戦場に行った。その後はわからない。

私は戦後三年余りたつてシベリヤから復員してきた。真庭の友は二度と同じ職場には戻って来なかった。広島の友は音信不通。

その昔「百歳になったら仕事を辞めた老人だ。ゆっくり長い年月を語り合おう」と話していた。そのときの話の種にと書き始めた日記帳、それが五十冊を越した。時々出しては見ているが無用の長物か。そしてまだ書

いている。百二歳になった今も書くのが癖になっている。他人には全く用のないものだ。おそらく字が書けなくなるまで書き続けるだろう。これも老人病の一つか。



## ラスベガス・ミュージカルの思い出

安東公一

海外旅行を八十歳で辞めてから、もう七年になる。足を悪くしたので仕方ない。しかし、今でもベッドインするといろんな海外旅行が夢に出てくる。モンサンミッシェルだったり、ハワイのワイキキの白砂と女たちだったり、海外の夢を見た朝はいつも



爽やかで気分がいい。そんな時はいつもアトリエに飛んで行きキャンバスに向かい木炭で下絵を描く。そして、色を重ねながら構図を変えてゆく。

さて、今回は「ラスベガスのミュージカルの思い出」F 30号の絵を夢見て出来上がるまでを書き残したくて描くことにした。

二〇〇三年秋、会社に会長から「安東君すまんがニューヨークからパリの十二日の旅に付き合ってくれんか」「その代わりニューヨークからパリはコンコルドで三時間の旅」だと言われ、コンコルドがなくなる年でもあるし「しめた」と思い受

けることにした。旅の相部屋は親友の中村スペースの社長となる。十二日間の旅なので、午後、フリータイムが一日あった。中村さんと話し合いせつかくのニューヨークなのでラスベガスに行こうと言うことになる。二人でセントラルパーク近くのホテルから歩いて五番街を下り、途中ステンドグラスが有名なチャペルに寄ったりしながらラスベガスをめざした。

五番街を随分さがりラスベガスの入り口辺りまで来たら赤い屋根の小屋がある。その小屋がミュージカルの当日券を売っている店なのだ。やっと見つけて、われわれ日本人は物語のないのがいいということだ、

シヨウ性の強い「ダンシング」と言う券が二枚残っているとのこと。ロングランの有名なシヨウをみることになる。真暗い舞台の中、黒人や白人が飛び交う、それも宙を高く飛ぶシヨウに先ずド肝をぬかれる。暗闇で骸骨が躍る、いろいろのシヨウの中、どれも芸術と言うより、最高の職人技と感じた。見終わってから当分感動とときめきがやまなかった。

ですから何年も経つというのにこのシヨウの夢をみるのだろう。赤い小屋を探すところからシヨウの感動まで、鮮やかに楽しく夢が再現してくれた。その日の朝のさわやかなこと…朝食を急いで摂り、アトリエに向かい、白いキャンバスに主

役のタキシードの男と金髪の女を中心にエキゾチックに描いた。

いろんな美術館があるがこれのお気に入りの作品は大切に我が家に飾ろうと思っている。それが、「ブロードウェイのミュージカルの思い出」である。でも、また次の夢を見た。それは劇団四季の「アイーダ」だ。この恋物語を絵にすることができかな？では又…。



# 歴史紀行

大きなできごと

些細な歩み

みな

人間の歴史

かたりべとなつて

伝えよう



洋画『思い出』遠藤 榮

## 春日神社よもやま―岡僧正と龍頭庵―

りゅうとうあん

栗井睦夫

長年の疑問が解けるのは嬉しいものである。その一つを記してみたい。

作東地域は古代資料の保存度が低いと言う。奈良や京の都から見て美作国は播磨国を経て海や大きな峠・湖も無く、比較的平坦な国境である。

山岳修験道の開いた後山行者山、奈義の瀧山など都にも聞こえた聖地であり、当粟井郷も藤原北家の荘園であった。その縁で春日大社の御分霊が勧請された。気候温暖にして作物の豊かに稔る美作国であるとも。群雄割拠の戦国時代、この美作の国の入口に当たる作東地域

を治めると備前・備中、因幡・伯耆をも望める。天下統一の足掛かりの中で幾度となく戦火にみまわれた。そのため貴重な資料が焼失してしまつたのであろう。当社も嘉吉二年（一四四二）と、享保十二年（一七二七）と二度にわたり羅災して多くの資料が焼失した。

そのような中で、言い伝えられていたことが、本当だったと解明出来たときの喜びは大きい。

その一つに「神輿みこしが出るとき、祝詞のりとに続いて般若心経を唱えた」という言い伝えがあったが、気にしたことも無かつた。

しかし、それが本当だつたと思われるのである。その足掛かりとなつたのは、平成二五年（二〇一三）行つた創建一千年記念誌発刊の為の地籍、切絵図、棟札、奉納額等の調査であつた。

当社に上がる坂道の手前右側に粟井春日歌舞伎の建物がある。その建物の西隣に当社が借用している駐車場の字名が「寺屋敷」となつており不思議に思つていた。また、明治十四年能登香神社の屋根葺替正遷座祭斎行 神主岡貞節郎 という棟札が見つかった。当社の社家と伝わるのは四家のみである。岡氏が神主をしたという資料も言い伝えも無く不思議に思つていた。それを一つに繋げてくれたのが、一昨年『作東の



文化』第四十七号に記した横二メートル縦五三センチの扁額である。明治三三年四月の太鼓奉納扁額には、最高額寄付者の豊福俊雄氏を筆頭に金額順に三十六人の名前が記されている。氏子さんの他に粟井中村銀山の鉦夫さん九名と、お坊さんと思われる岡僧正と二人の世話人の名前が記されている。

豊福氏は美作市馬形の氏子で豪農・素封家そほうかである。「姫新線の万ノ峠トンネルの開削に当たり太鼓を奉納して、安全祈願祭を行ったと思われる」とは『作東の文化』第四十七号で述べた。

世話人と記されてはいないが、実質の世話人と思われるのが前述の岡僧正である。その理

由は最後に記されているのに世話人と記さず、しかも本名を記さないで高額寄付をしていること等である。通常では神社に関係無い僧侶が高額寄付にされたり寄付の世話人になるのは考えられない。その上、当社に岡僧正の存在を示すものはこの扁額以外に無い。岡氏が別当の僧侶として存在した証を後世に残したかったのではと思う次第である。これ以降は棟札に神主岡貞節郎として度々登場する。

当社境内広場より西にのびる古道漂う椿の小径を辿って行くと、右手の少し小高くなつたところに、深い緑に囲まれた静かな佇まいの中に龍頭庵が建っている。これが神仏分離令



によって龍頭山りゅうとうざん淡相寺たんそうじが龍頭庵りゅうとうあんと名を変えて、春日座西の「寺屋敷」から現在地に移されたものである。

当社の麓を流れる粟井川には、かつて後山と同じ地名のついた道仙淵と呼ばれる深い青々とした湧が在った。修行僧が水



垢離を取ったと言われる場所である。後山の行者山で修行を積み、奈義との丁度中間に当たる淡相寺に籠り、神前で額ずいた。そして「武頭山の手水鉢」で散杖手法を行い、般若心経を唱えて法力を高め、奈義の瀧山に向かったと言われる。

僧侶の岡貞節郎氏は明治新政府の神仏分離令により神宮寺の僧侶の職を失った。しかし、檀家の無い神宮寺の僧侶は一代神主を認められ以後、神主岡貞節郎として活躍されたことが分かる。

淡相寺は別当の地位を失い、当時門前町として大いに栄えていた市場の氏子によって、現在地に龍頭庵としてその名を留めた。それ以降は市場の住民

に依って維持管理が継承されている。龍頭庵は英中霊場本尊千手観音菩薩七三番札所とある。(英中||旧大野村、大吉村、吉野村、栗井村)

龍頭庵の入口右手に岡貞節郎氏の眠る墓地がある。あたかも龍頭庵を見守るように建てられている同氏の墓石には自覚院舜道貫居士 明治二六巳年十月二一日行年六九歳とある。同一敷地内には「印鳳法師」の碑が建ち明らかに僧侶のものに分かる。

『英田郡史考』一六〇頁に学者岡貞節として掲載されている。それによると同氏は林野町の旧姓岡部氏で栗井中村の岡家の養子となった。備前で学び学者となり更に更に医術を究めた

後、栗井中村で医院を開業した。医術の傍ら子弟の教育に当たり人々の大なる尊敬を集め、慶応三年九月十四日病卒となり岡貞節郎氏の父と思われる。

岡氏の後継嗣(貞節郎氏の孫と思われる)も学に秀で東京大学医学部を卒業し宮内庁御典医になられたと聞き及んでいる。屋敷は当社の門前町として市が立ち繁栄していた市場に岡氏屋敷として今も名残を留めている。(春日神社宮司)



## 角南のつり鐘

井口祥子



角南の山の中腹に鐘があるとは、いままで全く知らなかった。人の目につかない山の中に鐘があるとは、思いもよらないことだからである。今年のある時、親しい人との会話の中で、「自分の家のお墓の近くに、戦争に出された鐘が又この地に戻され現存しているのよ」という話を聞き、うねくねと曲がった道を登って行くと小山の中腹の小屋に立派な鐘が吊るさ

れており、その素晴らしさに感動を覚えた。寺のない角南の地、しかも山の中にこんな大きな鐘があるとはとても思えなかった。返される時は、広島まで取りに行ったとか。この鐘の所有について村人に聞くと、角南神社の物だろうというので、角南神社の宮司をしている沖田氏に聞くと『角南神社の鐘』と書かれた文書を見せていただくことができた。それには詳しく鐘について記されていた。

角南神社の創建は、明らかではないが、もと丸山八幡宮と称して美作閭武郷の総鎮守であった。応仁年中（一四六七年頃）

守護職赤松政則によって社殿が造営され、隣接の名刹菩提山善福寺を別当寺としていたという。宝暦年中（一七五二年頃）の火災で衰微し、現在は部落の氏神になっている。

鐘は神社の向かいの小山の中腹に警鐘として吊るされ、ずんどう型の小形に属し竜頭は笠から突き出た棒を双竜が嚙む形で、鱗文(うろこもん)の上の宝珠も素朴で、双竜の相貌も平易、彫りも浅い。袈裟襷の崩れはなく、草の間を牡丹唐草文で飾っているほか素文である。

銘(池の間陰刻) 角南八幡宮  
推鐘銘

奉 鑄 鐘 要 旨

諸行無常 是生滅法 生滅滅  
己 寂滅為樂響

諸人快樂民安全当取富貴繫昌  
敬白

時宝永丙戌三天三月吉辰日

施主 祢宜沖田城太夫 本

願角南村住 治兵衛

鑄物師 津山住金原吉右衛

門尉藤原助清

(注) 宝永三年 一七〇六年

法量

通高九五 cm 竜頭高二一 cm



口径五四 cm

厚さ六 cm 乳の間高一七 cm

池の間高二四 cm

駒爪三 cm 鐘座径九・五 cm

今から三百有余年前に作ら

れた鐘、角南の地の人々の安全

を願って作られた鐘が、山の中

## 出雲街道の起点

延原順子

播磨の国・姫路は、西国街道  
から分岐した出雲街道の始ま  
りの町である。

美作と播磨を行き来してい  
ると、近くて遠いと感じていた  
両地域の関係が自分の中で、近  
くて近い美作・播磨に変わって  
きている。二つの国を結ぶ出雲  
街道は、古代から歴史を共有  
し、互いに支え合った街道であ

腹に厳然と存在し、角南の民  
を、じつと見守ってくれている  
んだなあと、思いました。

る。出雲街道を知ることによっ  
て我々は、隣国同士のより深い  
繋がりと関連を、歴史上の出来  
事を通して知ることができる。  
では、そもそも出雲街道の出  
発点はどこなのか。

姫路城下を通る西国街道を  
西進し、姫路市下手野の夢前川  
に突き当たると、民家の庭の隅  
に、大きな常夜灯が遺ってい



る。旅人はこの常夜灯を目印に歩渡りで、対岸に渡った。

現在の国道二号線夢前川西詰を、国道二九号線に沿って北に百メートルほど進むと、西国街道の交差点があり、その角に花崗岩製の五角柱の道標が立っている。高さは市内最大級で二・一三m、市指定文化財である。



表示してある文字は、

右(北)因州・伯州・作州・雲州方面

左(西)備前・九州方面

東 姫路・大坂・京・江戸

現在の道路と当時の道路が一致しない場合もあり、細かい場所の特定が困難な事例も往々にしてあり得る中で、安政二(一八五五)年に建立された道標は、出雲街道の起点を示す貴重な資料になっている。

さあ、ここから二五〇キロの出雲街道の旅が始まる。どんな景色が広がり、どんな出会いがあり、何が起きるのか、ゆつくり楽しみたいと思う。

(稲美町在住)



洋画『カリン』尾崎千代子

## 出雲街道文化財調査余話

豊福公支

美作市歴史文化財研究会往来・地名部会では、一昨年から市内の出雲街道に案内板を設置している。令和三年度は旧美作町内に三か所、令和四年度は旧作東町内に二か所（峠の地藏堂、今在家地内）である。設置に当たり、私有地を提供してくださった皆様に、誌面をお借りして心より御礼申し上げます。案内板は街道の道案内という機能だけでなく、街道沿いに現存する主な文化財も掲載しているのです、地域の文化財を知る手掛かりとしてもぜひご利用いただきたいと思う。

前置きが長くなったが、本稿

では往来・地名部会の一員として川北地区の文化財調査に携わり、印象に残った文化財を紹介させていただく。

### ① 福満鉦山跡と池塘竣工記念碑（峠）

峠の地藏堂から北へ約八〇



福満鉦山跡



峠谷池を北から望む

〇mの場所にひっそりと現存している。『作東町の歴史』（七〇三頁）によると、福満鉦山は江戸から明治期に銅が採掘されていたという。現地に行くと、現在も坑道の入り口と思われる穴がいくつか見られる。そして、福満鉦山の近くには細長い形状の溜池（峠谷池）がある。下流での鉦毒被害防止のために築かれたと思われるが詳細





記念碑

は不明である。池の南側の堤に近い山肌には「記念」と題する石碑（以下、記念碑）が掲げられ、次のように刻まれている。

『発頭人 古田喜(カ) □安東政吉 山本作治

大正八年十月五日建之

大正七年滄桑之變襲作／東地豪雨連日濁流汎濫／決潰池塘掠人命而化下／流不毛之地困憊極酸鼻／人有率先促衆耕地整理／組合完成池堤回復之工／事矣

起工大正八年一月廿日／竣了全年八月廿三日

工費金三千六百圓也

縣費補助／□別寄附金五百

廿圓也

／□□山岸(カ) 本鑛業所

日』

大正七年（一九一八）七月から十月にかけて、中国・四国地方は台風による水害が三度も相次いでいる。『作東町の歴史』（四〇一〜二頁）によると、七月九日からの雨が十一日午前から豪雨となって各河川が氾濫。各地で橋が流出し、堤防が決壊した。この豪雨は、十日から十三日にかけて四国西端をまっすぐ北上して日本海に抜けた台風の影響による。

記念碑からは、作東を襲った

この豪雨で峠谷池が決壊し、下流で人命が奪われるなどの甚大な被害があったことがわかる。そして翌年、耕地整理組合が県費の補助と寄付金を含めた莫大な工費をかけ、約七か月の工期を経て峠谷池堤塘の修理を完成させたという。工費三千六百円は、現在の貨幣価値で約一千万円程度と考えられる。



茶山付近

なお、この豪雨災害の復旧に当たり、大正七年十月二十四日から一週間、内務省土木局が实地調査に入っている。復旧のための工費総計は、町村補助も含めて二万四九〇〇円（約六億円）、工事箇所は一一九二箇所に及んでいる（『作東町の歴史』同頁）。当時は第一次世界大戦の好景気に浮かれる反面、この豪雨災害の翌月には津山や林野等へ米騒動が波及するなど、世情は混迷を深めつつあった。記念碑が刻む豪雨災害から約百年の間に、私たちの地域も度重なる甚大な自然災害に見舞われた。自然の猛威に私たち人間はなす術もない。しかし、この記念碑は、被災しても皆で力を合わせて復興に取り組み、災

害を乗り越える地域の人々の姿を示しており、今日における防災の教訓とすべき自然災害伝承碑として活用すべきではないかと感じた。

②茶山・一貫清水・茶堂（今在家付近）

川北（今在家）には「茶」に関連する伝承がある。茶山は、松江藩十代藩主で江戸後期の



一貫清水跡

大名茶人として著名な松平治郷（不昧公）が、参勤交代で出雲街道を下り、この地で休憩の際に茶席を催した丘と伝わっている。近くには一貫清水と呼ばれる湧水があり、茶席でこの水が使用されたとも考えられる。今在家から街道を東行し、吉野川の渡し場に向う街道沿いに古びた堂宇があり、近隣の人々は茶堂と呼んでいる。その南面の石碑には「永代毎歳從六月□日 至七月□日 接待」とあり、吉野川渡河の前後に旅人に茶を振る舞っていたと考えられる。

慶応四年（一八六八）三月、山陰鎮撫使の西園寺公望が山陰からの帰途、出雲街道を下って川崎村沢屋で休憩した際、藤



生村の道信新治が西園寺の茶の相手をしたという（『作東町の歴史』一三四頁）。なぜ川北（広い意味での江見）と「茶」なのか、現時点ではまったく関連性が不明であるが、茶堂の本格的な調査を進めることで何らかのヒントが見いだせるのではないかと期待される。また、川北地区の皆さんや本誌を



茶堂

読まれた方からの御教示をぜひお願いしたい。

誌面の都合で多くの文化財を紹介できなかったが、現存する地域の文化財は、その地域の特性を知る手掛かりを与えてくれるように思う。今後も一つの文化財を丁寧に調査し、

## 佐治漆について

橋谷田岩男

記録に残し活用することが、先人から受け継いだわが地域の活性化につながるものと確信している。今後とも、研究会の取り組みへの御理解と御協力を賜りますよう、お願い申し上げます。

国産漆は、全国各地で生産され、産地の名前がついている。備中漆は岡山県。丹波漆は京都。浄法寺漆は岩手県。会津漆は福島県。阿波漆は徳島県。佐治漆は、鳥取県を代表する漆であり、産地は鳥取市佐治町（以下佐治）である。佐治漆の本格的な生産が始

まったのは、元禄八（一六九五）年といわれている。漆は、雌雄異株であり、雌木には種がつく。種は蠟で固められていて、そのままでは発芽しない。脱蠟（ろうをとる）して、中に入っている実を取り出し、その実が発芽する。佐治では、実生を畑に撒いて苗をつくる技術を吉



素黒目 カップ

野（奈良）の漆掻き子に教わった。それによって、佐治の漆木の増殖がなされ、漆液も増産され、鳥取藩の保護・奨励のもと特産になった。

漆畑は、佐治の半分を占め、佐治川を挟んで南側の三郡変成岩層の山の斜面に集中して植栽されていた。幕末の記録では、漆木五千百本、漆液量三三三貫目（約千百七十kg）という

記録がある。佐治の漆生産は、明治、大正、昭和と引き継がれ、佐治は鳥取県の漆生産地の中心地となった。

漆掻き子（漆を採取する職人）は、村々に存在し三代続いた家系もあった。漆掻き道具は、福井から買っていた。この特殊な道具の使い方を、わたしは昭和の最後の掻き子に教えてもらった。なかなか使いこなすのは難しい。

佐治町は、町の中央を流れる佐治川の流域に集落が点在している。町の中央の加瀬木という場所は、漆掻き子が多く住んでいた地域である。採取された漆は、集積場を兼ねた掻き子の家に集められ、その漆が樽に詰められ漆産地に出荷された。流

通先は、輪島、京都、大阪、高松、岡山、島根、東京、そして鳥取市内であった。

輪島の塩安漆器工房は、佐治漆を使って漆器をつくり、その漆器を「輪島講」という販売組織を拠点として輪島漆器を販売した。その歴史は百年に及び「輪島講」は鳥取県全域におよんだ。智頭町の「輪島講」は、山根の會州堂の場所が拠点だった。智頭町には、漆に関する産業の歴史はない。

佐治漆は、昭和初期には「天下第一品の品質」という高評価を得ていた。たしかに、漆を買いに来た漆問屋との取引は長く続いていた。わざわざ遠路はるばる福井県や奈良県、福島県などから佐治漆を求めてやって

来た話も残っている。また、昭和四十年ごろから五十年代にかけて、佐治漆は日光東照宮の修理に使われている。

漆生産の衰退は、戦争及び戦後の高度経済成長による工業化、中国漆の輸入増加、プラスチック、化学塗料の普及などによることが大きい。また、社会現象として農村の若者の都会への流出による人手不足、後継者不足は、佐治町も例外ではなく昭和四十年を境に漆生産はゼロになった。

昭和四十年頃から鳥取市内の漆器製造も衰退し、従来の漆器屋が二、三軒平成まで存在していたがその後廃業した。漆工といわれる漆職人は、明治、大正、昭和戦前まで生業としてい

たが、戦争、鳥取大震災（一九四三年）、鳥取大火（一九五二年）によって職を失い減少していった。山陰地方は、交通の便利が悪く運送にコストがかかることなどから、県外に出荷する額も小さく漆器産地として成り立たなかった。現在、佐治漆の価値を見出し、有志達によって衰退した佐治漆の復活活動がなされている。そして、佐治

## 江見の移りかわり

昭和四十八年七月に落成した作東町中央公民館。玄関ホールの左側に、畳一畳の大きさの江見市街地を写した白黒写真（写真②）があり、「これはいつ頃のものかな」と来訪者の話題

漆を使った漆器造りも行われている。（智頭町在住）

参考文献 橋谷田岩男『佐治漆の生産と流通の変遷』（二〇一八）、鳥取民俗懇話会会報二一 号田中勢一郎



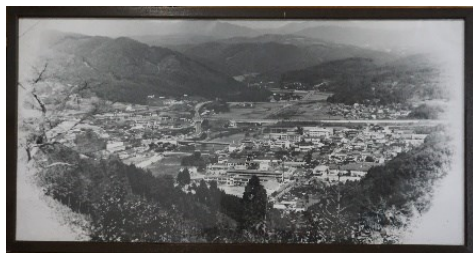
櫛 カップ

有友一正

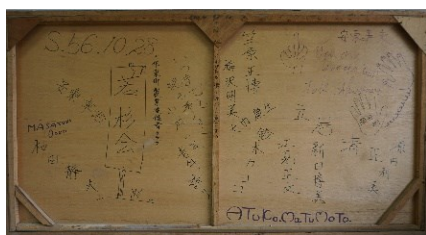
になっていました。

令和四年八月、公民館の建替えのため写真を取り外したところ、裏面に寄せ書きがありました（写真③）。昭和五十六年十月、作東町農業後継者クラブ若

杉会の名称と、その後の地域や農業を支えてリードしてきたメンバーの名前が記載されています。松本政幸さん（旧姓大内：六五歳）は、「郷路山から江見の街を撮影し、自分たちで現像し制作しました。」と話し、このあと撮影を担当した篤子さんと結婚されます。写真④は令



② 昭和 56 年 10 月 公民館に掲示されていた江見市街地の写真



③写真②の裏側の寄せ書き

和四年九月、松本さんたちの長男松本大介さんが、公民館の取り壊し前にドローンで撮影したものです。  
昭和初期までの江見はほとんど田んぼでしたが、昭和七年に片倉工業江見製糸所が開業し、その発展とともに店が増え、町が広がりました。戦後間もない頃は女子工員さんが三

百人以上いて、夕方五時を過ぎると江見の街がいった返し、江見劇場で映画があるときは近郷の青年も多く集まりました。昭和三十年に片倉の製糸所は操業を停止し（写真①）、跡地に作東中学校や公民館が建ちました。昭和三十三年に新しい大還橋ができて、翌年県道バイパ



④ 令和 4 年 9 月 ドローンで江見市街地を撮影



①昭和30年頃 片倉工業江見製糸所の周辺

ス（昭和四十年国道昇格）が開通。道沿いに作東町役場が建設されて、江見の風景が大きく変わりました。この時代を写し撮ったのが玄関ホールに掲示されていた写真です。

平成五年、作東町役場はバレンタインパーク作東内に移転

し、跡地には共同店舗「エミー」がオープン。現在は農協の事務所になっていきます。平成十七年三月に作東インターチェンジが開通し、美作市が発足。町役場は美作市役所作東総合支所になり、作東町中央公民館は作東公民館になりました。

現在建替え中の公民館は、今年十一月末に竣工予定。外観が

## ドローンで眺める湯ノ郷と三星・後藤氏

尾高試朗

できあがったら、作東地域の子どもたちに作東中学校運動場に集ってもらい、人文字を作ってドローンで撮影し、裏側に寄せ書きをしてもらって、新公民館に掲げる計画です。若い力を含めた地域の皆さんの総力で、公民館活動が進めば良いなと思っています。

（参考文献『美作今昔物語』）

私の生まれた湯郷は、湯治場として古くから人々の出入りがはげしい所である。鎌倉時代、「郷」に入っては郷に従えの言葉がある。郷は五十戸以上集落を形成していたことを意味するが、湯ノ郷の場合は百戸近

くだったのではないか。三十戸ぐらいの集落は余部「あまるべ」と言っていたらしい。ちなみに、姫新線の姫路近くの駅は余部「ヨベ」。この湯ノ郷に室町時代に地頭職として来たのが後藤氏である。

さて、室町時代の終わりに近い頃の湯ノ郷の有様を、上空からドローンで位田の方から林野「倉敷」に向かって眺めてみよう。

あれつ、重岩「カサネイウ」が無い。川は山の南を流れている。一六一七（元和三）年の大洪水で岩が現れる。その川上を見ると、高瀬舟がヨタヨタしながら下っている。そこは湯ノ潮



だ。難所である。湯ノ郷首頭に『腕におぼえの船頭さん』もこまるこまる湯ノ潮のイカダ舟』とある。

ドローンがもう少し東に進むと、元湯郷農協あたりに大きな建物が見える。後藤氏の役所かな。目を山の方に向けて見ると、ありや、お薬師様が東にずれている。古薬師寺である。ホテル竹亭の下の土地も薬師寺の土地。建物も見える。江戸時代になると、この場所に村役所が出来る。集落の中央近くに大木が二本見える。その根元に祠がある。村の天神様だ。今は天神様も大木もない。ドローンで少し南を見ると、湯治場の建物があり入湯客が「ワイワイ、ガヤガヤ」にぎやかだ。

その南に目をやると、茶屋がある。茶屋は、後藤氏経営の今風に言うところ「湯ノ郷レストラン」だ。後藤氏の番所の役人や入湯客、地元の人々、女性や子どもたちなどが飲食している。

ここは、後に一六一七年の大洪水によって八幡宮が流されたので、一六二四（寛永元）年茶屋の地に八幡宮が新しく建設された。

ドローンがもう少し東に進んで見ると、現在佐々家の墓地のある所は後藤氏の見張り番所があり、「カマエ」とも言う役人が数名いる。すぐ下は川である。三、四名の役人が舟を止めて何かを調べている。番所の方には建物が見える。番所の敷地内で取調所だ。縛りの弱い



室町時代だからゴタゴタはいつものことで入湯客に化けたスパイが潜入することも考えられるのだ。

ドローンはそこから東に向かう。お寺が見える。源大寺である。現在のグランドホテルの裏にあり、かなりの大きさのお寺であったようだ。三星合戦で後藤氏の建物はことごとく焼失したが、その時に源大寺も焼けたのではないかと思われる。さらに、源大寺から八十mぐらい東に行くと小田家の墓所がある。土地名を宮ノ前と言う。八幡宮は西向きと考えられる。西から鳥居・拝殿・本殿となり、西から東に進むと、山の斜面は畑で平地は田んぼ。一番広い所となる。湯ノ原である。

湯ノ原の東の方に木立が見える。祠がある。後藤氏が湯ノ郷の東の入り口として荒神様をお祀りしたと伝えられている。湯ノ郷七所荒神様の一つである。残りの六つはわからない。この所から東は林ノ尾(リンノ

オ)の川縁である。美作・倉敷の町は高瀬舟で栄えているのが見えている。ドローンでふるさとの昔を鳥瞰し想像してみた。これも歴史ロマンの楽しみ方の一つなのである。

## 平賀元義とその門人たち

矢内直行

昨年の第四八号に続き、江戸時代末期に美作地方を漂流した歌人、平賀元義(一八〇〇—一八六五)を取り上げることをお許しいただきたい。

彼の作東地域での足跡に従って、いくつかの寺社を巡り、和歌を挟みつつ、彼の弟子となつて薫陶を受けた人々とその歌をご紹介します。

まず、西端の粟井での歌  
妹が家の向の山は眞木の葉の  
若葉涼しく涙<sup>なみだ</sup>ひ出でにけり(元義)

元義が尊敬した賀茂真淵にも似て、清々しい新緑の表現となっている。

粟井総社の神官鎌田種造、近くの馬形の藤森恒景、豊福三平とその妻光子らも門人。



のどかなる春は来にけり玉く  
しげ二子の山に霞たなびく(恒  
景)

五月雨にぬれつゝ来ませ思ふ  
どちおもひを語り袖やほさまし

(光子)

次に、東端の宮原には天曳



(雨夫伎) 神社があり、そこで  
の歌。

石屋戸いしやどの神代の事も思はれて

あやにたふとき此御影山(元

義)

天曳神社の神官横山景義と

その妻千鳥も門人。

まそ鏡みれどもあかぬ我がや

どの庭の木の間ににほふ月影

(景義)

宮の原ふりさけみれば雨夫伎

の御社の梅にほふ月影(千鳥)

ほかに、医者いしやの横山景徳など

この界限には門人が多い。

見れどあかず吉野の郷の春の

夜にうめ白妙に月の照れば(景

徳)

やや南に下ったところの大

聖寺本堂には元義の書が掲げ

てある。というのもこの住職

であった僧の実雅は仏僧とし  
ては珍しく元義に入門を許さ  
れた数少ない一人で、それだけ

に熱心な弟子の母の死に際し

て悼んで詠んだ歌一首。

人の子の親に別るる時ばかり

悲しきものはあらじとぞ思ふ

(元義)

実雅は入門した当時は田殿

の栄徳寺に居り、その清滝を

詠んだ歌

たもとふり見れば涼しも清滝

の滝つ河瀬にうつる月影(実

雅)

南端の旧英田町との境に天

石門別神社いしどわけがあり、そこでの数

首からひとつ

神さびて立る石こそ石門別神

のすなはち御形なるらめ(元

義)

ここの神主磯山久磨とその父信茂の妻長尾茂登子も門人。

千早振雄神の河の川風に暑さ忘れて夕涼みする（久磨）

うつくしき君いまさねばぬば玉の夜床さぶしみ昔ぞ思ふ

（茂登子）

爽やかに自然を詠い、男女の情愛も素直に表現することが元義とその門人たちの歌の魅力であろう。

最後に、前掲の写真は、令和五年六月に鏡野町のホールにて、元義の和歌に作曲したものを中心に披露した演奏会でのもの。機会があれば作東地域でも演奏会を行いたい。

（津山市在住）

参考文献 竹内佑宜ほか著『平賀元義を歩く』日本文教出版



## 高梁の歴史探訪

松井洋子

作東文化協会の視察研修は、七月二十三日（日）に高梁市内において二十六名の参加で実施されました。

まず、松山藩の藩校だった有終館跡を見て禅寺・頼久寺を見学しました。小堀遠州作庭の枯

山水の庭は整然と手入れがなされ趣のある場所でした。

その後自由散策で、私は石火矢町ふるさと村の武家屋敷を通って町家の格子戸が続く通りを歩きました。町屋の旧醤油屋の休憩所には醤油樽や店の



勘定書や雛人形など多く展示されていきました。散策では昔の面影が色濃く残されていて情緒漂う素敵な場所でした。それから高梁国際ホテルで色彩豊かな日本料理をいただきました。

午後は、高梁市歴史美術館に入館すると、入口にWBC日本の栗山秀樹監督より高梁市長への書簡が展示されていました。次には、松山藩主の板倉勝静や山田方谷の書、水谷三代の資料など多くの古文書や松山城の模型が展示されていました。達筆なので読むことは叶いませんが、昔からの貴重な歴史資料が保存されていました。

そこから旧成羽町に向かう途中で、戦国武将の山中鹿之介



の墓所に立ち寄り、車窓から眺めました。縁になった地で大切に顕彰されているのは喜ばしいことです。

次は、安藤忠雄氏設計のコンクリート打ち放しの成羽美術館での鑑賞でした。「ベルギーと日本」の特別展示でベルギーと児島虎次郎と彫刻家の武石弘三郎を中心に多くの日本や

外国の方の作品が展示されていました。写実的な絵もありましたが、新印象主義の点描技法で描く絵の展示が多くありました。点描画は精根を尽くした作品群でした。彫刻の大理石の作品はとても滑らかで精巧に仕上げられていて、平素彫刻に接することがない私は感動させられました。二階には「成羽



の植物化石」の展示があり、シダ類などの葉がくつきりと残っている姿に心が動かされました。

その後、吹屋ベンガラ館に行き、ベンガラ（弁柄）ができるまでの復元された展示を見学しました。ベンガラ製造はとても根気のいる作業で、出来上がるまでは大変な日数を要する



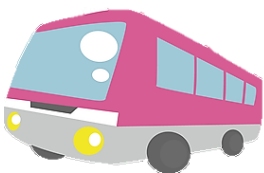
ことを知りました。一大生産地となつて事業家は莫大な利益を上げ吹屋が繁栄したことも理解できました。

その後、昔栄えた町並みを見学することになり、赤褐色の石州瓦の屋根が連なる伝統的建造物群保存地区を足早に巡りました。ベンガラ塗装の格子戸の町屋は昔の雰囲気を感じと

れて、また旧吹屋小学校は景観が良い場所です。何回か訪れた吹屋の町ですが、以前行った時には寂れた印象をもちました。今は若い方が移住されて喫茶店や食事処も増えて次第に変わってきているようです。これから変貌して賑わいを取り戻してほしいです。

高梁市内を巡って良い研修ができて満足しています。盛りだくさんの立案をしてくださり、お世話になりお礼申し上げます。

（掲載写真は江見精治氏撮影）



## 令和五年度研修旅行の報告

七月三日(日)、令和五年度の研修旅行を高梁市方面にて実施しました。参加者二十六名。作東図書館前駐車場を午前八時四十分に出発。のと香観光の大型バス(併和運転手)で旅行しました。幹事は会長・副会長が務め江見精治理事が写真記録を担当。研修資料(全十ページ)の視察先案内)は新田副会長が作成。併せて研修視察先ガイドも担当いただきました。本報告は、松井洋子さんの紀行文と一部重複しますが、写真により簡単に報告しておきます。

**頼久寺の石庭を視察** この禅寺では、遠方の愛石山を借景として備中国代官小堀遠州が作庭し

た禅院式枯山水の石庭を見学したほか、お寺に伝わる貴重な文物を拝観しました。



**石火矢町ふるさと村の武家屋敷を散策** 松山城の城下町が武家屋敷の町並みとして保存されていて高梁市の文化財活用レベルの高さを感じました。この辺りは方谷ゆかりの土地。山田方谷が学頭を務めた藩校有終館跡などもあります。

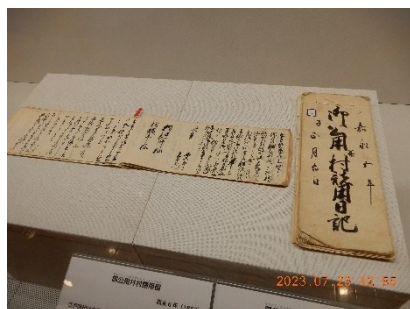
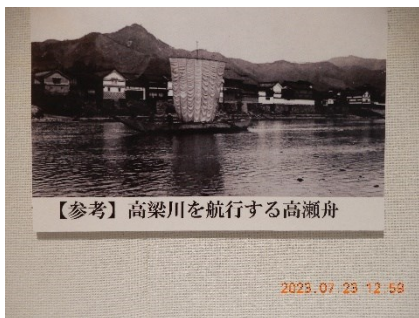




山中鹿之介の墓 作東の隣り  
町にある上月城と山中鹿之介。時代は変わってもその歴史的事実である鹿之介の墓地にバスが止まり、高梁市の重要文化財として大事に保存されていることに胸を打たれました。



高梁市歴史美術館 高梁市の古代から江戸時代への歴史を語る史料館。松山城の歴史や山田方谷の揮毫資料のほか古文書など、備中高梁の分厚く豊富な歴史と多くの保存資料に魅了されました。



高梁市成羽美術館 ここでは児島虎次郎とベルギー美術(絵画)の特別展が開催されていたのはラッキーでした。高梁出身の児島とベルギー留学画家たちを紹介し日本とベルギーとの絵画交流の関わりなどがよく分かり、美術(担当) 学芸員のご苦勞を偲びながら絵画展示工夫なども勉強させていただきました。短い時間の中で有益な鑑賞でした。





吹屋ベンガラ館 本山銅山の硫化鉄鉱を原料とするベンガラ製造は宝永四（一七〇七）年から始まった由。生業なりわいを展示したベンガラ館では鉱石から粉にする高度な水車システムを確立した近代化産業遺産が見学できました。



吹屋ふるさと村 かつて繁栄を極めた吹屋の街。現代人にフィットする「ふるさと村」数百メートルの通りを見事に蘇らせた観光開発力に驚き、かつ、文化財の保存活用という日本遺産認定の典型例であることを学びました。





来年度も充実した研修旅行になるように、会員の皆さまのご意見・要望をお寄せください。

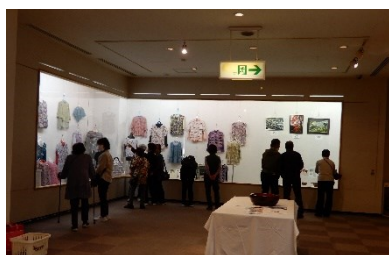
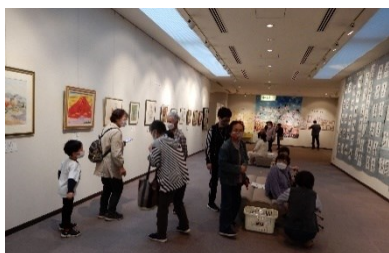
(文責・山下亨)

## 令和四年度文化展・芸能発表会の報告

### ■文化展

作東文化協会が令和四年度に開催した文化展は、作東美術館を会場に秋は十月二二～二三日に春は三月二五～二六日に開催し延べ約六百名の来館がありました。展示作品の数々は本誌のカットで紹介しております。

なお、三月には茶道部が展示会場の奥に「お茶席」を復活。外国人を含む大勢の方が和やかな雰囲気の中でお茶席を楽しみました。





■第十六回芸術発表会  
芸術部が作東バレンタインプラザを会場に  
芸術発表会を四年ぶりに開催しました。大  
正琴、日本舞踊、カラオケ、詩吟などの八種  
目三二名が練習の成果を発表して、大勢の  
観客から大きな拍手が送られていました。



# 短文芸

生きている

あかしとしての

自分の思いを

自分の言葉で

表現する

その表現が

万人の魂を

ゆり動かす

短文芸の力

伝統文化の力





# 短歌



春

福島美智子

永久に叫び続ける絵はありてムンク亡き後  
も何を叫ぶか

春めきて飼ひ猫外に物見へと老いたる体を  
季節は招く

ははその母の雑煮の懐かしく我には出せぬ  
味を思ひぬ

看護師

岩本敏子

母親の髪洗った事も無いだろうに男の看護  
師のやさしい仕業よ

九十の背に声かけ流しくる男の看護師は  
手さばきも良く

産月の近いと言いし看護師は元気で長生き  
してねと励ます

## 頑張れ

(土居)杉本幸子

リハビリで今日の歩きは良かったとほめられ次はもつと好い歩きを

啓蟄や地面よりそつと顔を出しすばやく走り姿も見えたり

今年また大空泳ぐ鯉のぼり段々減りて淋しくなりぬ

## 祖父 母

坂井はつ子

馬頭牛頭と観音ありて物語祖父にも祖母にも聞かされしかな

わが祖父は生絹すずしの衣服をおよばれに着てゆきにしを憶ひてをりぬ

馬酔木には毒があるゆゑままごとに使ふなと祖母やかましかりき

## ふる里にて

中村千州代

同窓会の賑はひ偲びつ彼の日から幾人の友逝きたるや淋し

夕焼けの向かうに母の坐さむかと今日も見上げぬ彩裾するまで

平穩なる日々こそわれの望みなれ緑豊けき里に古りつつ



絵手紙 原田豊子

## 何だ坂こんな坂

岡田 仍子

何だ坂こんな坂よと食ひ縛り足並揃へ半世  
紀過ぐ

整理せむと出して広げてまた仕舞ふをくり  
返しつつ一月過ぎぬ

「お出かけか」と声がかかるに「今日も又病  
院です」と小声で返す



書『知』根岸利行

## お花畑

平瀬 芳子

老人の「我儘」通るこの村は若人住めぬ村に  
なりゆく

爽やかに夜が明けたら飛んで来い「あさぎま  
だら」よわが家の庭に

天国のお花畑にゐるやうに「九輪草」とゐる  
木漏れ日浴びて

## ほのぼのと

土井つゆ子

玄関に兎の額を飾りたり「ピョーン」と飛び  
たし我は年女

グラウンドゴルフの大会で夫三位我は九位  
でサンキューの日よ

七回忌の母の法要を勤め終へ子や孫達とほ  
のぼの集ふ



## 試練を乗り越えて

島根和江

幾度と試練の坂を乗り越えて明日を迎へる  
今日のよろこび

絵画展行って楽しい友達と夫と共に天満屋  
にゆく

静かな山の教会で紅茶のむシナモンのかを  
りただよひながら



生け花 大倉淑甫

## あめんぼ(佐用町民プール)

末宗玲子

ドルフィンにもマーメイドにもなれずして  
老いたるトドは水と戯る

五七五とプールの中で指折れば「どこか悪い  
の」と友は問ひ来る

後何年プール通いが出来るかと思つて躊躇  
ふ水着の新調

## 空き家なれど

松井洋子

わが体に千の巣穴を作りぬむ老いといふ奴  
は頭もたげて

わが手を見て「畑仕事は忙しいね」と言つて  
下さる薬局の方

むらぎもの心のままに古里へ飽かず通ひぬ  
空き家なれど

## グータッチ

新田千晶

朝毎の小学生とのグータッチを交はして我は活力貰ふ

今朝もまた笑顔で交はすグータッチの小学生よ「いつてらっしやい」

春休みに入りて児童らとの出会ひなく心は虚し寂しきことよ

## コーラス記念コンサート

入矢敏江

オープニングの曲は「ハレルヤ」両の手を上げる指揮者に息を合はせる

「良かった」と突然深く抱かれゐるこんなに嬉しいハグ久し振り

透明の風船の中に浮いてゐるやうな心地にコンサート終わる

## 参道を登りて

浜田くに子

轉りに目覚めて窓の外見ればまだ汚れなき空気が光る

参道を高く登りてわが地区を眺めゐるなり  
国見すること

吹く風にも身震いすること杜の樹が揺れて纏ひし雨振りはらふ



絵手紙 小林悦子

あれから一年

日下智加枝

喉の奥ならぬこころの奥なれば葛根湯もお  
そらく効かぬ

風車から貌出さむかなただひとり足りぬ  
思ひにチューリップ眺む

しなびゐる花に水やり娘のこころ少しはゆ  
るんだらうかとおもふ

頬 緩 む

黒石初江

たどたどしき字の年賀状がリハビリ中の友  
より届くに胸を打たれぬ

雪降らず明るき日射しの朝が来て沈みし心  
も浮き立ちて来ぬ

「大谷」の笑顔を見れば頬緩みけふの憂への  
ひとつを忘る



書『楓』春名善子

片栗群生

小林洋子

肅肅と降る春雨に畑隅の添水の音は忙しく  
なるぞも

歩行なすは董たんぽぽ日日草花花枚拳にい  
とま無き道

山裾に片栗群生咲き出でてその紫はそよ風  
に揺るる



生け花 末宗悦甫

## コスモス

長澤和枝

こぼれ実を生えて咲きつぐコスモスが今年も数多風にゆれをり

紅と白ピンクのコスモス咲きほこり白蝶の舞ふ裏かどなるなり

咲き終へしコスモス切りて干しみるに青き蛙が蜥蜴が遊ぶよ

## 風吹くままに

豊田絢子

咲きみちて散りたる花は行き先のあてもなきまま風吹くままに

虫干しの衣を掛くれば匂ひ立つ時の流れと母の着姿

名も知らぬ小さき野花を手折りては活くるを樂しむわれのこの頃

## 九十歳を生きる

黒石登代

孫娘がメモしてくれるカレンダーうっかり忘れてまでも見直す

御先祖の墓より見下ろすわが家の庭に植ゑたい折々の花

落ちてゆく命と知りつつ今日も生くがんばれと告ぐわれの心に

穩しく閉ぢたし

角 利 津

何時しかに商店街も様変へて人無き道に鴉  
が遊ぶ

十六夜の月を離りゐる一つ星われとも思ふ  
夫を恋ひつつ

わが生も四楽章に入りたり穩しく閉ぢたし  
我が交響曲は

輪 廻 転 生

須 田 紀 秋

数知れぬ種が絶滅し幾千の新種陸続地球は  
廻る

若葉萌え緑茂りて紅葉し降り敷く落葉杜の  
ゆりかご

万物を潤し慈雨が河となり海に注ぎてまた  
雲生ず

地蔵ぼつねん

山 下 三 景

万緑の明治の森は厳かに花嫁花婿ゆるゆる  
歩めり

ホトトギス梅雨明け十日の深山に緑つらぬ  
き目覚めを誘ふ

桑の木も柿も伐られし峠道夕日浴びゐる地  
蔵ぼつねん

女孫よ頑張れ

関 内 惇

森の宮ピロティホールに來たりけり女孫の  
踊るを觀むとて妻と

ミュージカル「DADDY」にて踊れるは我  
の女孫ぞ派手やかなるぞ

主役にてあらねど主役をひきたつる役も大  
切女孫よ頑張れ

# 俳句



伊予椿

春名はるを

闇深しはぐれ蛍のふはふはり

竜田姫能登香の山に降り給ふ

山暮れて鄙ひなのふるまひとろろ汁

伊予椿漱石恋し子規恋し

春浅しまた読み返す若菜集

美作三の宮

山本宗雨

紅葉の雨の美作三の宮

金風はこれかと稲穂騒ぎある

未うしろが枯れの草葉に荒るる牧の畑

畦うしろが焼きや火色たちまち走り行く

高齢者仕様の新車日短



雀の子

豊田 絢子

にはとりのかたまりねむる今朝の冬  
冬耕や日だまりばかり鋤き返へす

葉桜の鳥のにぎはひ昼日中

左見右見おやはなれし雀の子

全天の喝采あびる夕焼かな



洋画『スイートピー』西井ひろみ

時鳥

井口 祥子

暮るるまで声を限りの時鳥

一葉ずつ友を忍びて新茶摘み

春めきてどこで啼くやら鳥の声

そよ風に雲ゆつたりと春惜しむ

歳重ね苦楽も皺に初鏡

遠昔

沖田 はるみ

羽子板の裏のへこみや遠昔

薄雲に縁うるませて花の月

翡翠の一閃瑠璃の影ひきて

山も野も暁けの静けさ残り月

強北風に幣ちぎれたる大鳥居

冬

坂井はつ子

十二月八日を誰も言ひ出さず  
初昔忘れぬしこと今ふつと  
峠路の六体地藏や寒明くる  
高窓をよぎりゆきたり冬の雲  
飛行機の轍か一筋冬夕焼

花 菖 蒲

高橋ヤエ子

振り返るたびに未練な夕桜  
青梅のうぶ毛朝日に光りをり  
暁に莖りんとして扱花  
束といて水切り香る花菖蒲  
踏み出して早る心や炎天下

四季の詩

青山美和子

山水の薄く凍りて浮き沈み  
糴炊ぞくのほのかな香り家に満つ  
庭先のモッコウバラの香りたち  
薄着して草取り励む老夫婦  
参道に花びら散りて春惜しむ



春 一 番

尾崎千世

二歳児の大人言葉や柿若葉  
春一番五体に緩み生まれける  
自然薯や使いこまれし播鉢に  
枯菊を焼けば色もつ炎かな  
身を振て幾千の色紅葉山

白 寿 歳

樽井悦子

皐月晴曾孫揃ひて白寿歳  
皐月晴送られし絵はほほ笑みて  
きらきらと夢のふくらむ大花火  
老るとは心の広さ秋の空  
別れ行く友のやさしさ萩の花

蕪 の 花

山本眞由美

両脇に赤穂義士像初詣  
冴返る窓全開の太極拳  
畑近き父の墓前に蕪の花  
誘はれて助手席に乗る小春空  
枇杷の木に枇杷の実色の袋掛く



## 台 風

(土居) 杉本幸子

クチナシの一輪の香の強さかな  
一匹の迷い螢の灯りかな

田植後蛙の合唱うるさくて

台風の気圧に泣かさるマヒ手足

田植後田のサギ動かず飼を狙う



## 七夕の青き竹

山下三景

雷雨去るとなたの声か月明かり  
燕ゆくころとなりけり蝉しぐれ

新涼や古寺石庭に風静か

七夕に選びて青き竹を伐る

夏虫の生死を見るや桶の水

## 龍 天 に

山本那実

エイプリルフル驛馬の素直なる

横書の恋の一句や春の風

龍天に雲の欠片もなかりけり

穴惑いSS<sup>エスエス</sup>と横切れり

四歳に頂の風那岐登山

# 川柳



折々に

井上健一

初参加基礎も知らずに五七五  
甘い声その手に乗るな詐欺電話  
闇サイト知らずに応募オリの中  
サクランボ口に入らず鳥の餌  
アホな蛇モグラの穴に頭入れ

夫婦

藤岡洋子

味方でも敵でもなくて夫つまが居る  
もういいかいまあだだよで生きている  
点滴てんてきや光を連れて落ちてゆき  
「結果」良し鰻も寿司も高くない  
看護師の優しさ他人と思えない

## 老いの日々

山本昌子

老い一人近所の愛で生かされて  
一コマの漫画で終わる今日の老い  
逝った娘にぐちを供えて今日を生き  
シルバーカーおして口はまだ達者  
一つ覚え二つ忘れて昨日今日

## スポーツの輪

影本 守

球を蹴るバレンティンに弾む声  
翔平の勢い止まらぬショートタイム  
五輪よりもっと燃えてるW杯  
eスポーツいいスポーツだ脳トレに  
田舎では出来ぬアーバンスポーツ部

## 皮算用

五反舎

ナストマト今年は狸の皮算用  
早起きでずぶ濡れのシャツ三枚  
田舎には爺は居れども虫見えず  
タブレット見ないで田舎の薪を割れ  
明日採ると川クレソンに降水帯





# グループ紹介

令和5年7月末現在

場 所	展 示 会 等	作 東 文 化 協 会 会 員			合 計	
		作東地区内	作東地区外	子ども (中学生 以下) 未加入者		
川崎教室		2		23	1	26
月曜日:高本公民館 木曜日:角南公会堂 金曜日:西町コミュニティ		2	1	21	3	27
講師自宅		2	2	13		17
刻 字:納田瑞恵宅 書 :妹尾美智子宅		6				6
作東農村環境 改善センター	春の絵画展(作東美術館)	3	3		2	8
作東農村環境 改善センター	春の絵画展(作東美術館)	2	3		3	8
		4				4
地区センター (吉野)	吉野郵便局・きんちやい館に展示	8				8
作東公民館		3	1			4
福山多目的 集会所	さくとう山の学校	4				4
介護予防支援 通所センター		11				11
作東公民館	初釜・月見の会	6				6
作東農村環境 改善センター		12	12			24
作東山の学校		10				10
作東公民館		8				8
作東公民館		5	5			10
作東農村環境 改善センター		6	2			8

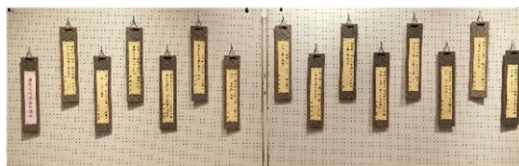
# 作東文化協会

部 名		グループ名	種 別	代表者氏名	指導者氏名	例 会	
書道部	1	阿部書道会	書道	真野みよ子	真野みよ子	月4回	
	2	書春名	書道	春名直子	春名直子	月3回	
	3	玲華書道教室	書道	末宗玲子	末宗玲子	月3回	
	4	刻字と書の会	書道	北村親嗣		刻字:月2回 書:月1回	
絵画部	5	作東水彩画教室	水彩画	妹尾美智子	妹尾美智子	月2回	
	6	作東油彩画教室	油彩画	妹尾美智子	妹尾美智子	月2回	
	7	すみれ会	絵手紙	岩本敏子	岩本敏子	月1回	
	8	ひめっ子クラブ	絵手紙	木南節子	—	月1回	
	9	江見ちぎり絵教室	ちぎり絵	唐内治美	杉本幸子	月1回	
	10	福山ちぎり絵教室	ちぎり絵	下山美好	杉本幸子	月1回	
茶華道部	11	ひまわりの会	華道	中田敏子	中田敏甫	月2回	
	12	茶の湯同好会	茶道	谷本津多江	谷本宗津	月2回	
文芸部	13	あがた川短歌会	短歌	濱田くに子	関内惇	月1回	
	14	山家川俳句会	俳句	春名貞和	春名はるを	月1回	
	15	作東川柳同好会	川柳	福嶋完治	—	2ヶ月に1回	
歴史部	16	作東歴史地名研究会	地名研究	新田祐之	会員相互研修	月1回	
	17	古文書を読む会	古文書	山本進一郎	—	月1回	

# グループ紹介

令和5年7月末現在

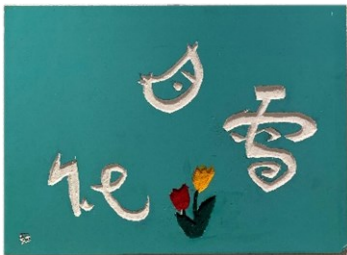
場 所	展 示 会 等	作 東 文 化 協 会 会 員			作 東 文 化 協 会 未 加 入 者	合 計
		作東地区内	作東地区外	子ども (中学生 以下)		
吉野公民館		5	2			7
JA勝英作東支店		2	4			6
JA勝英作東支店	琴伝流大正琴岡山県大会	4	5			9
JA勝英作東支店	琴伝流大正琴主催の演奏会		5			5
粟井・土居・吉野各 地区		22				22
商工会議所・土居公民館 (作東公民館代替施設)		4	7			11
旧粟井小学校 音楽教室		3			2	5
介護予防支援 通所センター		6				6
商工会議所 (作東公民館代替施設)		5				5
土居公民館		12			1	13
旧粟井小学校		5	1			6
作東公民館		12	4			16



春の文化展

# 作東文化協会

部 名	グループ名	種 別	代表者氏名	指導者氏名	例 会
芸能部	18 吉野ハピネス	大正琴	主 原 生 子	富 永 仁 美	月2回
	19 あずさの会	大正琴	岩 本 敏 子	中国本部講師	年6回
	20 作東しののめ会	大正琴	岩 本 敏 子	中国本部講師	月1回
	21 エバーグリーン	大正琴	藤 谷 守	藤 谷 守	年6回
	22 作東吟詠愛好会	吟 詠	光 辻 猛 美	江 見 悟	月2回
	23 作東カラオケ同好会	カラオケ	内 田 孝 子	土 屋 博 司	月4回
	24 粟井カラオケ同好会	カラオケ	松 本 満 寿 子	—	月2回
	25 コールわかば	コーラス	春 名 み どり	池 田 直 美	月2回
	26 フレッシュヨガ教室江見	ヨガ	赤 堀 桂 子	中 務 浄 美	月4回
27 フレッシュヨガ教室土居	ヨガ	春 名 千 歳	中 務 浄 美	月4回	
情 報 映 像 部	28 お達者ねっと倶楽部	インター ネ ッ ト	鳥 形 初 美	—	月2回
手芸部	29 手芸編物教室	手 芸	野 村 啓 子	原 田 豊 子	月4回



春の文化展



美術館入り口の絵

## 令和4年度 作東文化協会事業実施報告

コロナ禍で活動や練習が制限されましたが、研修旅行は3年ぶりに、  
芸能発表会は4年ぶりに実施しました。

### 【全体事業】

年	月	日	事業名	内容	
4	4	23	第1回理事会	年間事業計画・会員募集・文化誌「作東の文化」(第48号)発刊・視察研修について	
		5	11	第1回文化誌編集委員会	編集委員長の選任・編集の基本方針・編集内容・原稿募集・編集日程について
			20	第2回理事会	会員募集・文化誌「作東の文化」(第48号)・視察研修夏に予定・専門部グループ調査について
		20	—	会員募集開始	
	7	24	研修旅行	西大寺・牛窓方面	
	8	2	第2回文化誌編集委員会	応募原稿や画像の応募数確認・種類別仕分作業 応募原稿の校正作業について	
		22	第3回文化誌編集委員会	印刷原稿の校正作業	
	10	8	第3回理事会	文化誌「作東の文化」(第48号)配付・活動費受渡 秋の文化展について	
		22~23	秋の文化展	秋の文化展(作東美術館、作東バレンタインプラザ)	
	5	2	3	三役会	理事会・文化展協議
10			第4回理事会	令和3年度総括、春の文化展計画	
3		25~26	春の文化展	作品展示(作東美術館)	
			【同時開催】 第16回芸能発表会	25日リハーサル・26日本番(作東バレンタインプラザ)	
		26	令和5年度 作東文化協会総会	(作東バレンタインプラザ)	



春の文化展



芸能発表会

## 令和4年度 作東文化協会事業実施報告

### 【支 部 活 動】

部 名	年	月	日	内 容
江見・豊野支部	4	5	27	評議員会（決算報告・会員募集について）
		10	13	評議員会（文化誌配布・研修旅行について）
		11	13	研修旅行（市内遺跡巡り以南方面）
土居支部	4	6	1	評議員会（事業計画、予算決算）
		8	18	評議員会（研修旅行について一中止を決定）
		10	7	評議員会（文化誌の配布について）
福山支部	4	5	—	役員会、研修旅行（コロナのため中止）
		6	—	総会
		12	—	文化誌配布
	5	2	—	役員会
粟井支部	4	6	15	評議員会
		10	14	評議員会
		11	5	研修旅行
吉野支部	4	6	—	評議委員会（会員募集等）
		10	10	評議委員会中止 文化誌配布
		11	—	視察研修旅行中止
	5	2	—	評議委員会中止

## 令和4年度 美作市文化連盟事業報告

### 【連 盟 事 業】

年	月	日	事 業 名	場 所
4	5	11	美作市文化連盟運営委員会（総会）	美作市民センター
	6	1	芸能発表会第1回実行委員会	美作市民センター
		28	芸能発表会第2回実行委員会	美作市民センター
	7	30	芸能発表会リハーサル	美作文化センター
		31	美作市文化連盟第14回芸能発表会	美作文化センター
	8	5	芸能発表会第3回実行委員会	美作市民センター
	9	8	作品展第1回実行委員会	湯郷地域交流センター
	11	16	作品展第2回実行委員会	美作市民センター
5	1	14~20	美作市文化連盟第8回作品展	作東美術館
	2	15	作品展第3回実行委員会	美作市民センター
	3	13	芸能発表会第4回実行委員会	美作市民センター



## 令和4年度 作東文化協会事業実施報告

### 【専門部活動・1】

部名	グループ名	年	月	日	内容
書道部	阿部書道会	(定例)			毎週月～金開催 川崎教室
		4	8	—	山陽新聞主催県児童生徒書道展出品
		4	12	—	山陽新聞主催新春競書大会参加
	書 春名	(定例)			月3回 月曜：高本公民館 木曜：角南公民館 金曜：西町コミュニティー
	玲華書道教室	(定例)			月3回開催
絵画部	作東水彩画教室	(定例)			月2回開催
		4	5	3～5	春の絵画展開催
	作東油彩画教室	(定例)			月2回開催
		4	5	3～5	春の絵画展開催
			6	8～12	県北展出品
			9	7～11	県展出品
	土居水墨画会	(定例)			毎月1回
	すみれ会 (絵手紙)	(定例)			毎月第2火曜日
		4	7	—	暑中見舞いの絵
			11	—	年賀の絵
	吉野ひめっ子 クラブ	(定例)			月1回開催(7月8月休講) 吉野地区センター 10月3月は文化展準備のため2回開催
	江見ちぎり絵教室	(定例)			月1回開催(1月休講)
4		12	—	教室 江見・福山合同開催	
福山ちぎり絵教室	(定例)			月1回開催(1月休講)	
	4	12	—	教室 江見・福山合同開催	
茶華道部	ひまわりの会	(定例)			月2回開催(1月は開催なし)
	茶の湯同好会	(定例)			月2回開催

## 【専門部活動・2】

部名	グループ名	年	月	日	内 容
文芸部	あがた川短歌会	(定例)			月1回(第1月曜日)開催。6月,8月,9月休会
	山家川俳句会	(定例)			月1回開催(第4土曜)
	作東川柳同好会	(定例)			コロナ禍のため原則休会中 例会4月,8月 5年3月開催予定(総会)
歴史部	歴史地名研究会	(定例)			月1回開催
	古文書を読む会	(定例)			月1回原則第3金曜日に開催
芸能部	吉野ハピネス	(定例)			月2回開催予定だったがコロナで中止
	琴伝流大正琴 あずさの会	(定例)			隔月1回
		4	11	—	晴れの国岡山JA勝英女性部文化発表会出演
	作東大正琴 しのめ会	(定例)			月1回開催(第2木曜)
		4	11	—	晴れの国岡山JA勝英女性部文化発表会出演
	作東吟詠愛好会	(定例)			吉野支部:毎月2回 豊野支部:4~5月毎月1回、12月・3月2回、1月・2月3回 土居支部:毎月1回
		4	4	—	錬成会
		4	9	—	昇級・昇段大会
	(全体)	4	12	7	芸能部役員会
		5	1	11	芸能部役員会
		5	3	26	作東文化協会第16回芸能発表会
	作東音楽同好会	(定例)			月4回開催
	粟井カラオケ 同好会	(定例)			月2回開催(第2,4水曜) 令和5年1・2・3月コロナで中止 月1回開催(11,12月)
情報映像部	お達者ねっと 倶楽部	(定例)			月2(第1・3火曜日)
手芸部	ビーズを楽しむ会	(定例)			月1回開催(12,1月は開催なし)
	編物手芸教室	(定例)			月4回開催

※解散グループ 書道部 白雲書道会、棋道部 双山囲碁クラブ



芸能発表会



# 作東文化協会会則

## (名称)

第一条 本会は作東文化協会と称する。

## (目的)

第二条 本会は作東の文化生活の向上を期すると共に、会員相互の親睦を図ることを目的とする。

## (事務所)

第三条 本会の事務所は美作市教育委員会作東分室内におく。

## (事業)

第四条 本会は第二条の目的を達成するために次の事業を行う。

- 一 講演会・研修会・展覧会等の開催。
- 二 文化誌などの発行。
- 三 その他文化の推進に関する事業。

## (会員)

第五条 第二条の趣旨に賛同し本会の事業を推進する個人を会員とする。

## (組織)

## 第六条

- 一 本会に部及び支部をつくることができる。部は、書道・絵画・園芸・茶華道・文芸・歴史・写真・工芸・芸能・棋道・情報映像・手芸とする。
- 二 支部は、江見・豊野・土居・福山・粟井・吉野とする。

## (役員)

## 第七条

本会に次の役員をおく。  
会長一名、副会長二名、理事、部長、副部長、支部長、評議員若干名、監事二名

## (役員の仕事)

## 第八条

- 一 会長は会を代表し会務を統括する。
  - 二 副会長は会長を補佐し会長に支障があつた場合は会務を代行する。
  - 三 理事は会をつかさどる。
  - 四 部長は部を統括し副部長は部長を補佐する。
  - 五 支部長は会務をつかさどり支部の振興を図る。
  - 六 評議員は運営について協議する。
  - 七 監事は会計を管理する。
- 第九条 (役員選出)
- 一 会長・副会長は理事会で選出し総会で承認を受ける。
  - 二 監事は総会において選出する。
  - 三 理事は部長・副部長・支部長をもつてあつる。
  - 四 部長・副部長は部で、支部長は支部において選任する。
  - 五 評議員は部長・副部長・支部長が推薦し理事会において選任することができる。
  - 六 任期中途の補充役員は理事会において選任することができる。

## (事務局担当者)

## 第十条

事務局担当者は会長が委嘱する。

(役員任期)

第十一条 一 役員任期は二年とする。ただし再選を妨げない。

二 任期中の補充役員任期は前者の残任期間とする。

(顧問及び参与)

第十二条 本会に特別顧問・顧問及び参与をおくことができる。特別顧問・顧問及び参与は総会の同意をえて会長が委嘱する。

(会議)

第十三条

一 総会は毎年一回開催することができる。但し必要に応じて会長は理事会の承認を得て臨時総会を開催することができる。

二 評議員会を以つて総会に代えることができる。

三 理事会は年四回開催する。但し必要に応じて臨時理事会を開催することができる。

(経費)

第十四条

本会の経費は会費・補助金・市よりの事業委託料・その他をもつてあてる。

一 会員は年額一〇一〇〇〇円の会費を納入するものとする。

(会計年度)

第十五条

本会の会計年度は毎年四月一日に始まり三月三十一日をもつて終わる。

(会則の改正)

第十六条

この会則は、総会の決議により改正することができる。

(付則)

一 この会則は昭和六十三年四月一日より施行する。

二 平成十年三月二十九日会則一部改正 平成十年四月一日より施行する。

三 平成十一年三月二十一日会則一部改正 平成十一年四月一日より施行する。

四 平成十四年三月二十四日会則一部改正 平成十四年四月一日より施行する。

五 平成十七年三月二十一日会則一部改正 平成十七年四月一日より施行する。

六 平成二十年三月二十八日会則一部改正 平成二十年四月一日より施行する。

七 平成二十一年三月二十二日会則一部改正 平成二十一年四月一日より施行する。

八 平成二十八年三月二十七日会則一部改正 平成二十八年四月一日より施行する。

九 令和四年三月二十七日会則一部改正 令和四年十月八日より施行する。



# 編集後記



◆新型コロナが5類に移行し研修旅行にも大勢の参加がありました。今夏は小笠原よりきつい猛暑日が続く熱中症注意の告知放送を聴く毎日。畑仕事は早朝と夕方に集中し気象レーダーで「線状降水帯」の動きを見て暮らす日々。「地球は沸騰化の時代に入った」と国連事務総長が述べていたのは七月です。

◆農村文化の誇りである自然。その生き物環境が危機的状況です。「トンボやカエルのいる田舎に行きたい」と都会っ子たちは言うが、田舎の自然の生き物は姿を消しつつあります。半世紀余り化学肥料や農薬を大量に使ってきた農村では昆虫や川魚などの生き物の生態系が破壊され、海では川からのプラゴミ等が漂う。「環境にやさしい」から「SDGs」に標語を変えても根本的な手を打たない日本。どうする農山村の自然破壊。養老孟司氏は「全国的に虫の数が減っている。怖いほどだ」「そ

のことをほとんどの人が気にもしない。その事実こそが怖い」と話しています（八月十七日付け山陽新聞）。

◆所感寸言でも農村自然の危機や生活文化の課題が語られています。「共生」を読むと、前田留菜さんは水田にいた多くの生きものたちの種類も数も激減していると具体的に指摘。改めて農山村の自然の現実に愕然とします。AIが進展する今日、西村睦美さんの「手書きの文化」から手書きは脳力アップの思考ツールだと再認識しました。作家・浅田次郎氏も「小説書きにはパソコンは使わない、すべて手書きしている」と語っています。井上健一氏の「点字ブロックも危険な施設だ」とのご指摘は駅のホームの安全性への警告です。

◆随筆随想では、実母の残した短歌の数々を歌集にまとめた中田敏子さんの「最後の親孝行」に感銘。さらにその短歌の一首一首が感動的です。また、長瀬真澄氏の「ばあばんへの手紙」は、孫（小三）が可愛がってくれた曾祖母の突然の死を悲しむ短くも心温まる手紙文です。浅田年史氏の「我

が家のお茶」では自家製のカワラケツメイ茶を清々しいお話にしています。

◆歴史紀行では、栗井睦夫氏の「春日神社よもやま」は、近隣の字名「寺屋敷」の不思議から解き起こし僧正・岡貞節郎に関するわくわくする歴史秘話となっています。また、井口祥子さんの「角南のつり鐘」では、釣鐘の発見とその由来など綿密に研究されておりその成果に頭が下がります。

延原順子さんは出雲街道の起点に関する情報を提供しています。さらに、出雲街道の歴史文化財を研究している豊福公支氏から「出雲街道文化財調査余話」と題して川北地域の調査結果の一部を投稿いただきました。続編を期待しております。塗師である橋谷田岩男氏の「佐治漆」のお話から作東でも漆器（ジャパン）の教室ができないかと思ひになります。

◆来年は、本誌『作東の文化』発刊五十周年記念号をまとめる年になります。記念号では、通年のご投稿や短文芸に加えて、五十周年特別寄稿、会員グループの活動紹介、協会沿革史のほか作東文

化発展のための提言などを盛り込んだ特集にしたいと考えております。会員の皆さまはもとより各方面からのご投稿や編集ご協力を心からお願ひ申し上げます。

編集委員一同





作東バレンタインプラザ

作 東 の 文 化  
第49号

令和5年10月1日発行

編 集 作東文化協会文化誌編集委員会  
(美作市教育委員会社会教育課)

編 集 委 員 鳥形 初美            中田 敏子            新田 祐之  
                 山本 直人            末宗 玲子            春名 真和  
                 山本 進一郎        妹尾 美智子        山下 亨  
                 江見 精治

発 行 所 作 東 文 化 協 会  
岡山県美作市教育委員会 社会教育課  
〒709-4234 岡山県美作市江見945  
TEL(0868)72-2900  
HPアドレス <http://bunka.bo.jp/>

印 刷 所 株式会社プリントバック  
〒617-0003京都府向日市森本町野田3-1

